

フィールドワークで作成したチラシやポスターなど制作物の一部をご紹介します！



商店のぼりおよび商店街のマップ（2017年度・駒形通り）



ポスター（2017年度・浜松文芸館）



焼津市浜通りで作成した行灯（灯り展）



チラシ（2018年度・駒形通り）



マルシェの看板（2018年度・庵原）



チラシ（2018年度・東静岡）



チラシ（2018年度・とうもんの里）



「サクッとさくま」Vol.1～特別最終号まで全17冊を制作（佐久間）



テーマイメージ（松崎町・商店街）



避難訓練ワークシート（2018年度・松崎町・観光と防災）



オリジナルキャラクター（2018年度～・浜松文芸館）



広報誌（2019年度・県営団地）



パネル（2018年度・浜松文芸館）



クリアファイル、冊子、季語カード（2020年度・浜松文芸館）



観光看板デザイン（2020年度・松崎町・観光と防災）



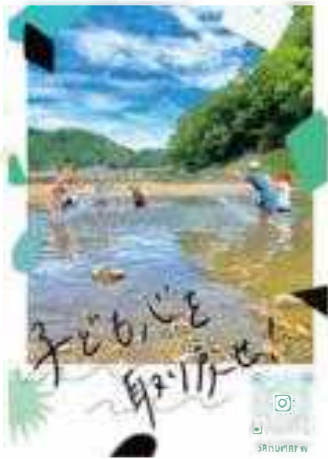
ライブペイント（2019年度・東伊豆）



クチコミマップと「避難するときに気を付けたいこと」の図解（2020年度・松崎町・観光と防災）



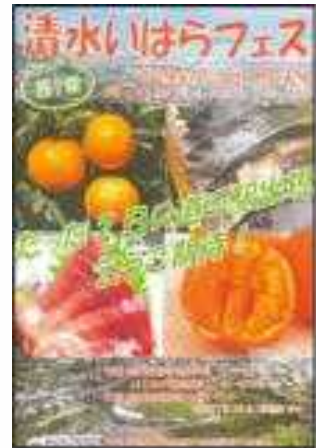
YouTube動画と足元灯のディスプレイデザイン（2021年度・浅間通り商店街）



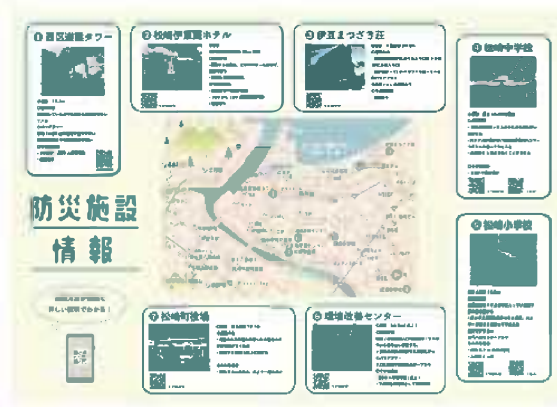
ポスター（2021年度・佐久間）



Tシャツ（2021年度・松崎町・商店街）



チラシ（2021年度・庵原）



観光防災マップと防災施設情報（2021年度・松崎町・観光と防災）



ポスター（2021年度・東伊豆）



eコママップ（2021年度・ジオパーク・防災）



チラシ（2021年度・ジオパーク・教育）



ポスター（2021年度・ジオパーク・教育） ポスター（2021年度・学内連携拠点） 取材記事（2020年度・学内連携拠点）



チラシ（2021年度・おまち）

チラシ（2022年度・おまち）

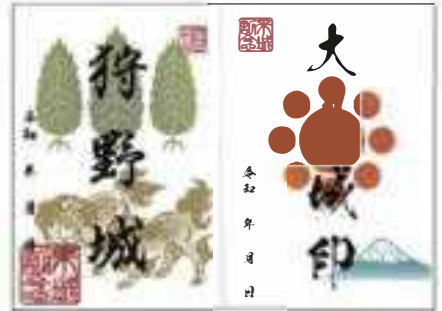


パンフレット（2022年度・松崎町・商店街）

チラシ（2022年度・松崎町・観光と防災）



NEWHAKU (看板) (2022年度・東伊豆)



御朱印帳デザイン (2022年度・ジオパーク・教育)



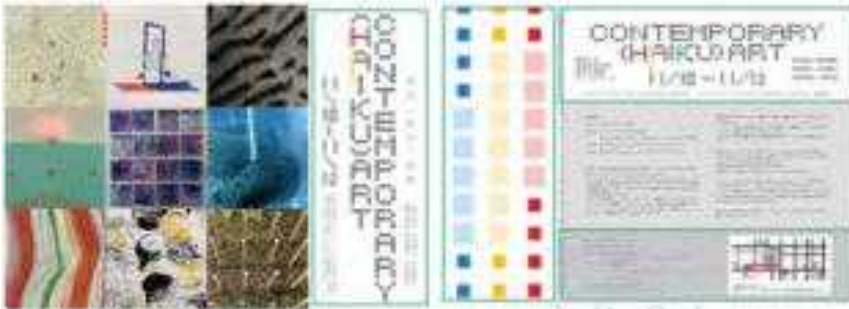
ロゴマーク (2023年度・庵原)



フォトスポット (2023年度・浅間通り)



ポスター (2023年度・佐久間)



ちらし (2023年度・浜松文芸館)



パッケージデザイン (2023年度・松崎町・観光と防災)



看板 (2023年度・東伊豆)



シャッターアート (2023年度・東伊豆)



チラシ (2023年度・東伊豆)



チラシ (2023年度・伊豆半島全域・ジオ)



チラシ (2023年度・松崎町・商店街)



おでかけMAP (2024年度・清水港)



Instagram投稿 (2024年度・おまち)



図録 (2024年度・浜松文芸館)



ポスター (2024年度・佐久間)



巻き上げ機のペイント (2024年度・東伊豆)



チラシ (2024年度・伊豆半島全域・ジオ)



チラシ (2024年度・伊豆半島全域・ジオ)



チラシ (2024年度・多世代)



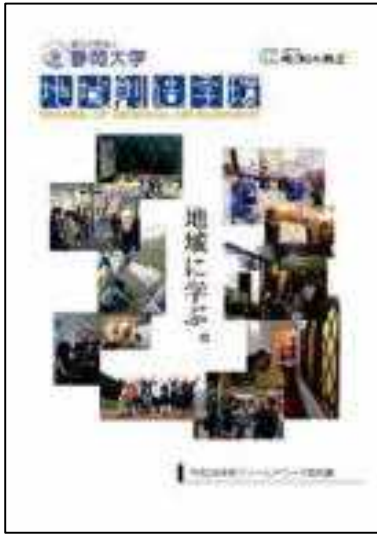
チラシ (2024年度・松崎町・商店街)



これまで各年度の活動をまとめ、学生たちが作成した フィールドワーク報告書



(学環HP)
https://www.srd.shizuoka.ac.jp/fw_report/



こちらからもご覧になれます ⇒

[静岡大学リポジトリ](#)



III. フィールドワークと地域カウンターパートとの対話

静岡大学地域連携会議の議事録の分析から

川崎 和也（静岡大学グローバル共創科学部／地域創造学環）

はじめに

現在、大学教育におけるフィールドワーク（以下、FW）は、地域社会の課題を実践的に学ぶ教育方法として広く導入されている。しかし、FWは、大学側の教育目的だけでなく、地域側の受け入れ体制・期待・負担の上に成り立つ協働的な営みでもある。にもかかわらず、大学教育におけるフィールドワークについては、その教育的効果や実践事例に関する研究（e.g.岡崎2023.小川2024.清原2023.林2019.日高2023）の蓄積は厚いが、「地域の側の視点」からFWの実態を体系的に分析した研究（e.g.坂本2025.中川2019）は必ずしも十分とは言えない。

本章は、静岡大学地域連携会議の議事録を資料として用いて、静岡大学地域創造学環のFW活動に対して、地域の側が抱く課題や期待、成果などを抽出し分析することを目的とする¹⁾。

1. 地域連携会議とは

静岡大学地域連携会議は、「地域創造学環規則（以下、学環規則）第7条第2項」の規定に基づいて、平成28年（2016年）4月に設置された会議体である。地域連携会議の目的・役割は、「静岡大学地域創造学環地域連携会議規則（以下、地域連携会議規則）第3条」において、次のように記されている。

- ① 地域課題及びニーズの所在検討
- ② フィールドの選定
- ③ フィールドワーク及びカリキュラムの効果検証
- ④ その他学環の運営に関する事項又は学環地域連携会議が必要と認める事項

地域連携会議は、地域創造学環長、地域創造学環副学環長の他、「本学の役員又は教職員以外の者で地方公共団体、地域企業、特定非営利活動法人等又は学環運営会議の意見を聴いて学環長が任命する者」（地域連携会議規則第2条第1項第3号）によって構成される。その任期は1年で、再任は妨げられていない（地域連携会議規則第2条第2項）。

さて、地域連携会議規則第2条第1項第3号によって選出される地域連携会議の構成員は、例年、地域創造学環のFWの授業で活動をする全ての地域（フィールド）から地域連携会議委員を1名ずつ選出し、就任を依頼している。多くの場合、学生を受け入れている組織・団体等の構成員に地域連携会議委員に就任してもらっている。つまり、地域連携会議とは、地域創造学環のFWの授業において、学生を受け入れたり、指導にあたりたりする現地（フィールド）のカウンターパートから地域創造学環のFW教育に対する率直な意見をうかがい、その改善を図ってゆくための機関なのである。

平成29年（2017年）以降、地域連携会議は、毎年5月に実施する「地域創造学環フィールドワーク報告会」の後に開催されている。地域連携会議では、例年、FWの授業を履修し終えた3年生に対して実施する「フィールドワーク評価アンケート」の結果を報告した後で、地域連携会議委員による各フィー

開催日	開催場所	意見交換の内容
平成28年（2016年）9月27日（火）	静岡大学	<ul style="list-style-type: none"> ●フィールドの継続期間について ●フィールドワークメニューの増減 ●地域内での学生報告会実施の有無 ●全体報告会と地域別報告会の位置づけ ●フィールドワークの実施時期イメージ ●定員割れ時の対応 ●他フィールドの見学や交流 ●行政側の参加方法
平成29年（2017年）5月25日（木）	清水テルサ	<ul style="list-style-type: none"> ●受け入れ側の責任と姿勢 ●フィールドワークの実施計画のあり方 ●地域課題解決への学生の関わり ●継続期間の検討 ●行政関与のないケースの課題 ●学生のフィールド選択 ●学生の成長と情報発信
平成30年（2018年）5月31日（木）	静岡県男女共同参画センター	<ul style="list-style-type: none"> ●フィールドワークの実施回数について ●補助金申請と企画期間の課題 ●学生のフィールド継続について ●他フィールドとの交流や連携 ●学生と地域の関係性 ●新年度の学生配属について ●フィールドワーク担当体制と学生支援
令和元年（2019年）5月30日（木）	静岡市産学交流センター（B-nest）	<ul style="list-style-type: none"> ●フィールドワークの授業の制度設計の課題 ●フィールドワークにおける安全管理（リスクマネジメント） ●学生の受け入れ体制 ●学生のスケジュール調整の課題
令和2年（2020年）	新型コロナウイルス感染拡大のため、メール審議	<ul style="list-style-type: none"> ●フィールド同士の情報共有のための体制構築 ●コロナ禍における地域との関係のあり方 ●地域住民との合意形成のあり方 ●調査倫理
令和3年（2021年）7月8日（木）	静岡大学	<ul style="list-style-type: none"> ●学生のスケジュール調整の課題 ●予算問題
令和4年（2022年）5月26日（木）	静岡市産学交流センター（B-nest）	<ul style="list-style-type: none"> ●コロナ禍におけるオンラインの活用と課題 ●ICTスキルの地域差と対応の必要性 ●フィールドワークの質的向上と課題
令和5年（2023年）5月25日（木）	グランシップ	<ul style="list-style-type: none"> ●移動手段・個別活動の扱い ●学生のスケジュール調整の課題 ●助成金の活用と学び ●経費の扱いに関する問題
令和6年（2024年）5月30日（木）	グランシップ	<ul style="list-style-type: none"> ●学生と地域の関係性の深化 ●学生の学びと成長 ●地域への具体的貢献 ●FW終了後の今後への懸念

表1 地域連携会議の意見交換の主な話題（抜粋）



写真1 地域連携会議の様子
(令和6年(2024年)5月30日)

ルドの活動状況や課題等についての意見交換が行われる。本章では、平成29年(2017年)～令和6年(2024年)までの8年間にわたる地域連携会議での意見交換の議事録にある地域創造学環のFWに関わる地域団体、NPO、行政担当者等の発言記録を質的データとして扱った。そして、これらのデータに対して質的内容分析を行い、年度ごとに議題としてあがった話題を分類した(表1)。

2. 地域連携会議の議事録の結果と分析

さて、表1に示した各年度の話題について、さらなる検討を行い、いくつかのテーマに整理した。本節では、これらの中から5つのテーマを取り上げて、それぞれの内容を紹介するとともに、分析を試みた。その詳細は以下の通りである。

(1) FW活動に関わる金銭的諸問題

FW活動の経費等に関わる金銭的問題は、多くのフィールドに共通する課題である。たとえば、あるフィールドでは、学生が商店街を紹介するマップを作成したが、年度末であったために印刷費を確保できず、対応に苦慮することがあった。事前に相談があれば、自治体や商工会で予算措置があったという。学生は何らかのアウトプットを生み出したいと考える傾向にあり、その過程で想定していなかった予算が発生するために、地域の側からは「毎回悩みの種になっている」との声がたびたび寄せられている。

FW活動の経費に関して言うと、地域創造学環では、宿泊費については、学生1人につき1泊あたり5000～6000円を学生厚生会費から支出している。その他の経費についても、必要経費と判断すれば、大

学から支出することも可能である。しかし、たとえば、飲食店街の活性化イベントに取り組むフィールドでは、まず、学生たちにイベントを体験してもらいたい思いがあるものの、大学の経費からは飲食代を支出することは難しいことから、イベントの実行委員会や協賛企業の予算で学生たちの飲食代をまかなったという。ここには、大学の会計規則と地域の実践活動との間に存在するギャップが表れていると言えるだろう。

一方で、地域連携会議では、予算を持つ自治体や団体等の既存事業に学生の関心をうまく接続させることで、FW活動に必要な経費を確保している事例も報告されている。また、補助金の活用については「補助金の採択は、自分たちの活動や計画性が共感を得られた確証であり、それは学生たちの自信につながる。仮に不採択でも、自分たちの活動や計画の振り返りの機会として有意義である」との意見も示されている。このように補助金の活用は、FW活動の高度化に寄与する側面があるが、他方で、持続性の観点からは、その財政基盤が不安定であることも示唆している。

(2) 地域の受け入れ体制

地域創造学環のFWの特徴のひとつは、1年生～3年生までの複数の学年が1つのフィールドで同時に活動を行う点にある。そのため、なかには10名以上の学生を同時に受け入れる組織・団体も存在する。こうしたことから、地域連携会議では、受け入れる学生数が増えることに対する地域の側の不安が示されることもあり、各フィールドにおける学生の受け入れ体制や方法についての情報交換も行われた。

地域の学生の受け入れ体制は、組織・団体の規模や経験値などによって異なる。1名で対応する組織・団体もあれば、4名程度のチーム体制を構築したり、さらには自治体が窓口となってセーフティネットを提供するなど、その形態は多様である。そのなかで、地域の側からは、学生を「家族のように受け入れている」との発言もあり、地域は学生の単なる受け入れ主体にとどまらず、学生の成長を見守る役割を担っていることがうかがえる。

他方で、地域の受け入れ担当者のなかには、大学進学の実験がなく、学生支援に少なからずの不安もあるとの発言もあった。地域側の心理的負担が過度に高まるリスクもあり、大学側には、こうした地域の負担や不安を軽減するためのサポート体制の構築も求められていると言えるだろう。

(3) 大学・学生と地域の関係性の構築と継続性

学生を受け入れている地域の多くは、人口減少や少子高齢化、過疎化などのさまざまな地域課題に直面している。そうしたなかで、大学との協働によって地域課題を解決する契機として、FW活動に対する地域の側からの期待は大きい。学生たちが地域課題の解決に関与することの意義については、若者や大学生ならではの発想や視点への期待に加えて、彼らが地域社会において「媒介者」としての役割を果たしている点を評価する意見もあった。たとえば、次のような発言にその一端がうかがえる。

「課題解決に関わる人をどのように探してゆくかが課題ではあるが、大人では入りにくい部分もある一方で、学生には地域に入りやすいという利点がある」

他方で、学生と地域の信頼関係を深めるために、その背後では、受け入れ組織・団体、担当者らが尽力している事実があることも忘れてはならない。地域連携会議では、学生と地域が築いてきた信頼関係

を継続するために、担当者が回覧板に学生の活動情報を掲載しているという取り組みが紹介されている。また、地域連携会議では、次のような取り組みも紹介された。

「これまでの活動が単発的になってしまっていた点を反省し、まずは（担当者である）私自身が自治会や公民館の会合に出席し、地元に入り込んでいった。その結果、学生と地元をうまく結びつけて、より強いコミュニケーションを構築できたと思う」

また、地域においては、地域のリーダーからの情報は、必ずしも地域の全てのメンバーに共有されているとは限らないという。他のメンバーへの説明や意見聴取の場を設けるなど、地域住民の合意を得ながらFW活動を進めてゆくことが重要であるとの意見も示されている。こうした合意形成の重要性をめぐる意見は、地域内の情報共有の不均衡を補う必要性を示すとともに、FW活動が地域社会の内部構造にも影響を及ぼしていることを示唆している。

学生たちは、基本的には大学の授業の一環としてFW活動に取り組んでいる。この点に関して、地域の側からは、学生たちはFWを「地域のため」と捉えているのか、「自分自身の学びのため」と捉えているのか気がかりであるとの声があった。ただ、総じて言うと、「学生を受け入れている組織・団体には喜んでいただいている」との意見が大半であり、地域の側は、学生たちの活動やその存在を肯定的に評価していることがうかがえる。

一方で、地域連携会議では、2年半のFW活動を終えて、学生たちが地域を離れてしまうことへの寂しさも語られ、FW活動の終了後も学生と地域の関係が継続する仕組みづくりへの期待も示された。ただ、なかには、FW活動の終了後も学生たちと連絡を取り続け、地域で築いたつながりを維持している事例や、卒業生が仕事を通じて地域と再び関わりを持つようになった事例も報告されている。こうした事例は、FW活動が一過性の体験にとどまらず、長期的な関係性を生み出す可能性を示していると言える。

(4) FW活動が地域に及ぼす影響

FW活動は、地域社会や地域住民らにもさまざまな影響をもたらしている。たとえば、地域連携会議では、「地域住民も学生のインタビューには格好をつけて話すために、他人事ではなくなる。学生が来ると、いろいろ刺激を受ける」との声が寄せられている。つまり学生の存在は、地域住民に「外部からの視線」を意識させ、彼らの語りや行動の変容を促しているのである。こうした地域住民の意識変容をもたらしているという点は、FW活動が地域社会に与える象徴的な効果として注目されるだろう。

さらに、学生と地域の相互作用が「互いを育てる関係」として言及されている点も重要である。たとえば、地域連携会議では、次のような発言があった。

「FWに来る学生から地域も影響を受けている。（学生たちに）下手な大人の姿を見せられないという、互いに良い影響がある。学生を育てているというよりも、こちらも育てられている」

これらの発言からは、FW活動は単なる教育プログラムにとどまらず、地域社会の自己変革を促す触媒として機能していることをうかがうことができる。

(5) FWの制度設計の課題と成果

最後は、地域創造学環のFWの授業の制度設計の課題と成果についてである。地域連携会議では、FWの制度設計に対して、さまざまな意見が寄せられた。

ひとつは、FW活動の継続性と計画性の不足への懸念である。これまで繰り返し述べるように、地域創造学環のFWの特徴のひとつは、年度ごとの積み上げを重視している点にある。それ自体は、学生たちの将来的な成果につながるとして評価されている。他方で、学生たちが地域のニーズを十分に議論し、それを継続的なテーマにしてFW活動に取り組んでいるかについては、地域の側から懸念が示された。また、FWの活動範囲や位置づけの曖昧さも指摘されている。つまり、調査から課題設定までを目的とするのか、それとも課題解決の提示や計画策定まで踏み込むのかなど、到達点が不明確であり、その結果、2年半のロードマップを描きづらいという。

学生の日程調整も多くのフィールドに共通する課題である。たとえば、あるフィールドでは、学生の参加可能な日が休日に限られる一方で、行政との交渉は平日にしかできず、両者の日程調整が困難をきわめたという。また、学生たちは、学業の他、部活動やアルバイトなどにも従事しており、とくに大会時期は学生のFW活動への参加が難しかったことも報告されている。さらに、地域の繁忙期が元旦など大学の休暇期間と重なるために、地域の実情を学生たちに見せにくいという声もあった。

FWは、学生たちの学びの機会である一方で、地域住民にとっては、喫緊の課題に関わる取り組みである。こうしたことから、地域に入る際の学生たちの姿勢や倫理観の徹底が不可欠であることが指摘されている。また、学生たちの基礎的調査力の不足への懸念も示されている。とくに1年生が定性的記述のみに依存して課題設定を行ってしまう点が課題として言及され、学生の基礎学力の強化を求める意見があった。

他方で、地域の側は、学生たちの「失敗を通じた学び」や「気づきの価値観」を重視し、彼らが不確実な社会を生き抜く力としてFWを位置づけていることも明らかとなった。また、自分自身が大学教育に対する知識を十分に持ち合わせていないことへの不安を打ち明ける地域の担当者もいたが、そうしたなかでも、外部講師を招聘するなど、学生たちにより良い学びの環境を提供するために、地域の側が創意工夫している事例も報告されている。

3. 9年間のフィールドワークを振り返って

さて、地域創造学環のFWの最終年度にあたる令和6年(2024年)に開催された地域連携会議では、過去9年間にわたるFWの活動を総括しながら意見交換が行われた。

まず、FWは単なる地域課題の解決にとどまらず、「人と人との関係を育み、維持する機会であった」という意見である。具体的には、学生が継続的に地域と関わり続けることで、地域住民との信頼関係が深化し、その結果、学生による地域活動が着実に前進したことが報告されている。とくに、高齢者にとっては、学生の存在は、彼らの生活の活力となり、歳月を重ねることで、学生への期待は高まっていったという。また、活動初期には現状の課題への対応が中心であったが、地域との関係性を深める過程で得られた学びを基盤にして学生たちが地域の将来像を描く提案を行うようになったことは、重要な成果として評価されている。

さらに地域連携会議委員からは、「学生に多様な関心を提供できる場としてFWには意義がある」との意見も示された。数値化可能な成果の重要性を認めつつも、個々の学生が何に関心を抱き、何を獲得し

たかという質的側面もまた重視されるべきであり、その点において、学生が地域に入って学ぶことの意義はきわめて大きいと言えるだろう。

これらに加えて、学生のキャリア形成にFWが果たした役割の大きさも指摘されている。たとえば、学生から進路に関する相談を受けたことがあったという。地域の側にとっては、こうした相談に少しでも関与できたことは、地域での経験が決して無駄ではなかったことを認識する契機となったと語っている。また、地域連携会議では、卒業後、学生が「地域おこし協力隊」として地域に戻ってきたり、地域にある施設に関心を抱いた学生が、その後、その施設の運営支援に携わるようになったケースがあることも報告されたが、これに対して、地域からは、「これは、自分が関わった地域という意識があるのだと思う。FWをやってきた意味があったと感じた」との意見が寄せられている。

4. おわりに

本章では、静岡大学地域連携会議の議事録を手がかりにして、地域創造学環のFWを「地域の側の視点」から捉え直すことを試みた。

地域連携会議の議事録の分析を通じて、FWは学生の実践的学習の場であると同時に、地域にとっても外部の視線を取り込みながら自己を省察し、関係性を更新していく契機となっていることが明らかとなった。とりわけ、学生と地域住民が互いに影響を与え合い、「ともに育つ関係」としてFWが機能している点は、地域創造学環のFWの特徴として特記すべき点である。他方で、その背後には、経費負担、受け入れ体制、日程調整、制度設計の不透明さなど、地域の側に偏りがちな負担が存在していることも確認された。FWの運営にあたっては、地域の側の善意や尽力に委ねられてきた部分を可視化し、大学と地域がFWの目的や役割を共有し、相互の責任と支援のあり方を制度的に整えていくことがFWの持続可能性を左右すると言えるだろう。

地域創造学環のFWは、令和6年（2024年）度をもって終了した。9年間にわたるFWの実践を通じて培われてきた成果や、そこから明らかになった課題をいかにレガシーとして継承し、大学と地域が対等なパートナーとして相互に学び合い続ける協働の仕組みへと深化させていくのが、あらためて問われている。これは「地域志向大学」²⁾を宣言として掲げる静岡大学に課せられた重要な課題である。

脚注

- 1) 静岡大学地域創造学環のフィールドワークの制度設計や教育効果などについては、平岡（2022）、皆田（2019）を参照のこと。
- 2) 静岡大学の「地域志向大学」宣言
 (<https://www.shizuoka.ac.jp/outline/vision/effort/regional/document/regional.pdf>)
 （最終閲覧日：2026年2月9日）

参考文献

- 岡崎宏樹（2023）「プロジェクト学習を構造化する－動的アレンジメント、感性の共感、第3のネットワーク」、神戸学院大学現代社会学会監修、山本努・岡崎宏樹編、『現代社会の探求－理論と実践』、学文社：226-248.
- 小川洋一（2024）「教職科目における大学周辺フィールドワークと地域調査レポートの発表授業の効果」、

『駿河大学教職論集』第9号：27-51.

清原桂子（2023）「地域と大学の協働による政策提言の取り組み」、神戸学院大学現代社会学会監修、山本努・岡崎宏樹編、『現代社会の探求－理論と実践』、学文社：278-298.

坂本健成（2025）「域学連携における学生フィールドワークの成果と課題：福岡県糸島市における4つのプロジェクトを事例として（下）」、『流通科学研究』第24巻第2号：59-75.

中川秀一（2019）「「関係人口」からみた大学教育におけるフィールドワーク」、『経済地理学年報』第65巻：1-9.

林 琢也（2019）「地域づくりの現場で学ぶフィールドワーク教育の成果と課題－郡上市和良町を事例に」、『経済地理学年報』第65巻：45-60.

日高謙一（2023）「学生たちの学びの記録と分析」、神戸学院大学現代社会学会監修、山本努・岡崎宏樹編、『現代社会の探求－理論と実践』、学文社：249-277.

平岡義和（2022）「地域創造学環のフィールドワーク－立ち上げ、現状、課題」、『静岡大学地域創造教育研究』第3号：11-19.

皆田 潔（2019）「地域に学ぶ－地域創造学環フィールドワークの取り組み」、静岡大学人文社会科学部・地域創造学環編、『大学的静岡ガイド－こだわりの歩き方』、昭和堂：208-209.

静岡大学地域創造学環地域連携会議規則

(平成28年1月20日規則第16号)

改正：平成28年4月1日規則第2号 平成30年6月11日規則第4号
令和元年7月17日規則第101号 令和2年3月30日規則第263号
令和6年2月28日規則第38号

(趣旨)

第1条 この規則は、静岡大学地域創造学環規則（平成28年1月20日制定。以下「学環規則」という。）第7条第2項の規定に基づき、静岡大学地域創造学環地域連携会議（以下「学環地域連携会議」という。）の運営等について必要な事項を定める。

(組織)

第2条 学環地域連携会議は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

- (1) 地域創造学環長（以下「学環長」という。）
- (2) 地域創造学環副学環長（以下「副学環長」という。）
- (3) 本学の役員又は教職員以外の者で地方公共団体、地域企業、特定非営利活動法人等又は学環運営会議の意見を聴いて学環長が任命する者
- (4) その他学環地域連携会議が必要と認める者

2 前項第3号の者の任期は1年とし、再任を妨げない。

(役割)

第3条 学環地域連携会議は、次の事項を審議する。

- (1) 地域課題及びニーズの所在検討
- (2) フィールドの選定
- (3) フィールドワーク及びカリキュラムの効果検証
- (4) その他学環の運営に関する事項又は学環地域連携会議が必要と認める事項

(議長)

第4条 学環地域連携会議の議長は、学環長をもって充てる。

2 議長に事故あるときは、副学環長がその職務を代行する。

(事務処理)

第5条 学環地域連携会議の事務は、グローバル共創科学部事務部において処理する。

(規則の改正)

第6条 この規則の改正は、学環地域連携会議の議を経るものとする。

附 則

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

附 則（平成28年4月1日規則第2号）

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

附 則（平成30年6月11日規則第4号）

この規則は、平成30年6月11日から施行し、平成29年10月1日から適用する。

附 則（令和元年7月17日規則第101号）

- 1 この規則は、令和元年7月17日から施行する。
- 2 この規則による改正後の第2条第1項第3号の者の任期は、同条第2項の規定に関わらず、令和2年3月31日までとする。

附 則（令和2年3月30日規則第263号）

この規則は、令和2年4月1日から施行する。

附 則（令和6年2月28日規則第38号）

この規則は、令和6年4月1日から施行する。

IV. 地域創造学環フィールドワークの教育効果と地域—大学へのインパクト

阿部 耕也（静岡大学名誉教授）

1. はじめに

特徴ある教育プログラムとしての地域創造学環（以下、学環）の核心となるフィールドワークが開始されたのは、2016年度後学期であった。学環フィールドワークは、留年生のための措置等を除き、基本的に2025年3月で終了した。学環生には1年後期から3年後期までの2年半にわたるフィールドワークを終えた時点で、取り組みに関する自己評価アンケートを依頼してきた。全期にわたる回答が得られたこのタイミングで、フィールドワークの教育効果および地域—大学へのインパクトについて総括を試みる。

自己評価データについては、各年度フィールドワーク委員会で検討され、平岡義和学環長（当時）や太田隆之委員長（当時）らによってまとめられてきた。その結果は、学環内だけでなく地域連携会議でも報告されてきた。また、フィールドワークが始まって5年経過した時点で平岡学環長により論考¹⁾にまとめられている。本章ではこれらの先行報告を参照しながら検討を行う。

様々な課題を抱える地域に入り、長期にわたり課題解決を目指して実施されてきたフィールドワークは、地域や大学に何らかの影響・インパクトを与えてきたと考えられる。フィールドワークの成果、実施前後の地域との連携、卒業生の活動等にふれながら、この点についてもフィールドワークが終了したこの時点でまとめておきたい。

2. フィールドワークの教育効果

ここではフィールド選定等を含めた学環フィールドワークの概要を改めて確認し、学環生のフィールドワークの取り組みに関する自己評価アンケートの結果を分析していく。

2.1. フィールドワークの概要

学環フィールドワークは、県内各地で地域課題を具体的にまた継続的に学び、地域の方々とともに課題解決をはかるという目標が設定されている。1年後期から3年後期まで5期2年半にわたり、県内各地のフィールドから選択して行われるため、学環の場合は多くのフィールド・受入れ先が必要となった。教職員とすでにつながりがある地域、地域課題への取り組みを大学に要望した地域等に協力を依頼し、了承を得られた受入れ先がフィールドとして設定された。（当初は遠隔地域と近隣地域各1か所を担当することとしたが、2年目以降は全フィールドから1か所を選択するかたちに変更された²⁾。）

初年度から最終年度まで14～16のフィールド／テーマでフィールドワークが実施されてきたが、この数は他大学と比べてかなり多く、期間・参加学生数の面でも受入れ先には大きな負担となった。フィールドワークをサポートいただいた県内各地域・団体のご理解・ご協力には改めて深く感謝したい。

フィールドが複数となりそれぞれ活動内容も違い、担当する教員も異なることから、統一的なフィールドワークの成績評価基準を作成することが必要になった。フィールドワーク委員会でも議論して作り上げたのが、以下に示すフィールドワークの「評価基準」である。この基準については学生たちにも周

知しており、フィールドワークという授業で獲得すべき知識、能力が何かを明示している。

〈フィールドワーク評価の基準〉

- 1) フィールドにおける観察、インタビュー、作業だけでなく、フィールド外においても、適切な情報収集、準備作業などが主体的に行えているか
- 2) 地域・施設の状態や課題、資源などについての深い理解に基づき、フィールドワーク計画が立てられているか
- 3) フィールドワークにおける知見、反省点を整理し、それを踏まえて、個人、あるいはグループとしてフィールドワーク計画を修正・実行できているか
- 4) グループにおいて協働ができているか、地域の方々と意見交換、交渉なども含め適切なコミュニケーションがはかれているか

上記のように、評価基準はいわゆる「社会人基礎力」に近い評価項目となっている³⁾。学生たちが2年半のフィールドワークを終えるさい、自らの活動をふり返って自己評価させる必要性が議論され、フィールドワーク終了後の3年後期に提出させる「総括レポート」と「評価アンケート」が設けられた。本章で論じる教育効果の素材として取り上げるのは後者で、評価基準をもとに作成した項目に関し自己評価を行うもので、学生全体の集合的な傾向が把握できると考えられる。自己評価アンケートの概要は以下の通りである。

〈調査の概要〉

調査対象：各年度後期FW III Bを履修した3年生

調査方法：学務情報システムを用いたネットアンケート調査

調査時期：毎年2～3月

回収率：90.4% (353名中319名回答)

〈調査票〉

これまでのフィールドワークの経験を踏まえて、問1～9について、それぞれ以下の選択肢から1つを選び、その番号を記入してください。

(集計に当たって逆転=そう思うが5点)

1. そう思う
2. ややそう思う
3. どちらとも言えない
4. あまりそう思わない
5. そう思わない

問1 あなたは、フィールドにおいて適切なインタビュー、観察などが行えるようになったと思いますか。

問2 あなたは、フィールドの状況や課題などについて、十分に理解できるようになったと思いますか。

問3 あなたは、実施したフィールドワークにおける知見や反省点を踏まえて、新たな計画が立てられるようになったと思いますか。

問4 あなたは、フィールドワークを実施するのに必要な事前準備を適切に行えるようになったと思いますか。

問5 あなたは、学生の間でフィールドワークを実施するのに必要なコミュニケーションがはかれるようになったと思いますか。

問6 あなたは、学生の間で適切な役割分担をはかれるようになったと思いますか。

問7 あなたは、フィールドの人々と適切な意見交換や交渉を行うことができるようになったと思いま

すか。

問8 あなたは、フィールドワークを行うにあたって自分に足りない能力などについて自覚できるようになったと思いますか。

問9 あなたは、全体として地域で活動していく上において必要な能力が身についたと思いますか。

2.2. 自己評価アンケートの結果概要

〈全体の概況〉

2018～2024年度の評価アンケートの結果は、図1に示すとおりである。2年半にわたるフィールドワークの取り組みについて学生による自己評価であるから、フィールドワークの教育効果を検討するさいの直接的データとはいえない。しかし、その限界を踏まえるならば、フィールドワークが自分にとってどのような経験であったか、どのような成果であると感じられたかを推測し、教育効果を評価する手がかりになるだろう。

7年間を通して、いずれの項目においても5点満点で概ね平均4点を超え、自己評価は高い。年度による変化はあるが、とりわけ「フィールドの状況や課題の理解」(問2)、「自分に足りない能力の自覚」(問8)が高くなっている。2年半のフィールドワークを進める中で、地域課題を探りその解決に取り組みながら、フィールドに関する理解を深めるとともに自らについて見つめ直すことができるようになったと推測される。

他方、「事前準備」(問4)、「インタビュー、観察」(問1)の設問については、自己評価が低めであり、フィールドに入る前の取り組み、地域における調査技法の実施については、他の項目ほど自信がもてていないようだ。

〈年度別の概況〉

時系列の変化についてもみておこう。7年間の変遷を見ると、多くの項目が次のようなパターンとなっている。すなわち、最初の4年間は評価が漸進的に高まるが、続く2年間で大きく評価が下がり、最後にまた大きく上昇するという変化である。(「フィールドの状況や課題の理解」(問2)、「知見や反省点を踏まえた企画」(問3)、「事前準備」(問4)、「学生間のコミュニケーション」(問5)等。)

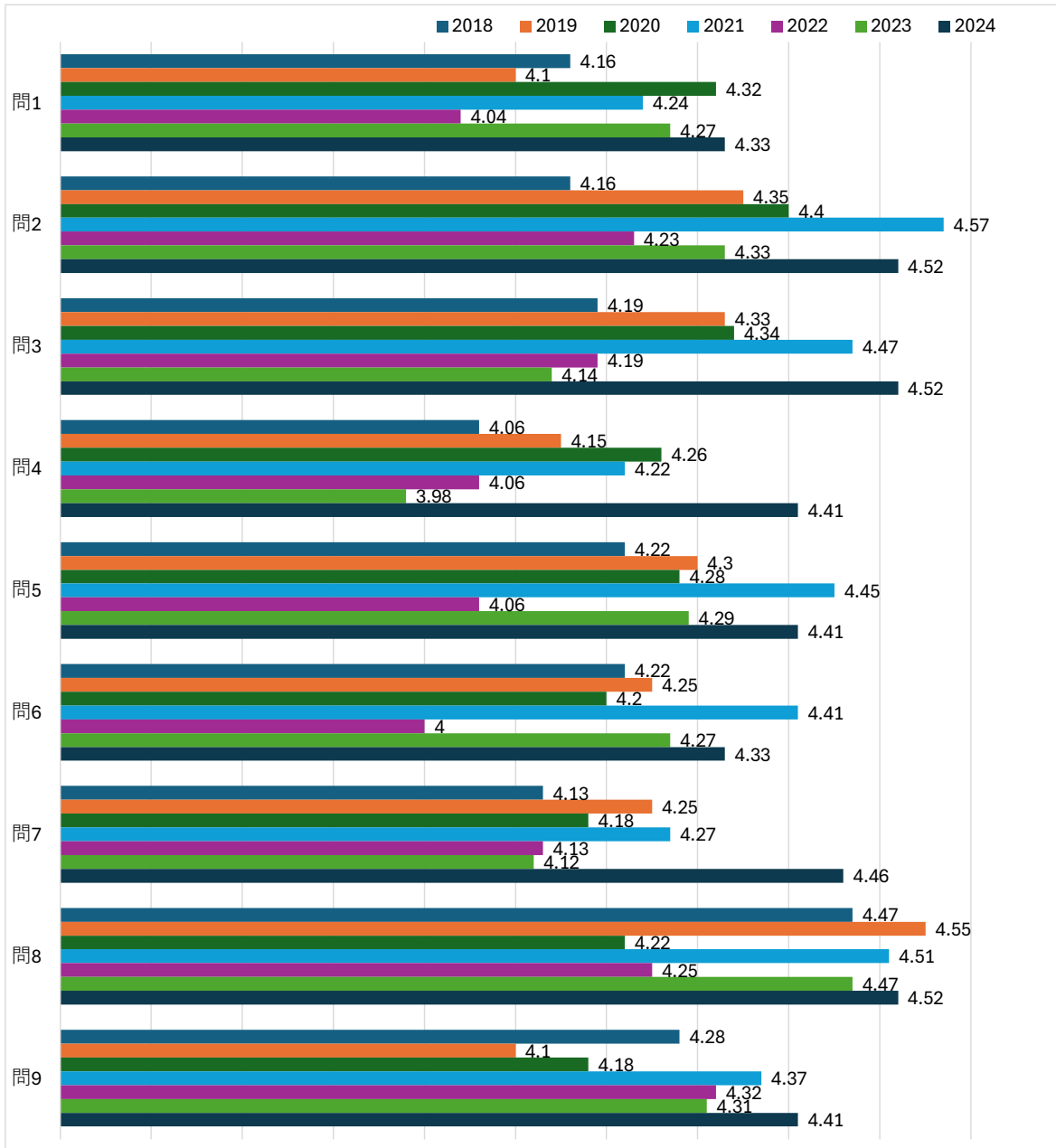


図1. 各設問の年度別平均

この変化は、時期的に新型コロナウイルス感染症の影響を反映していると考えられる。2019年度終盤から2021年度にかけてコロナ禍の影響を受けフィールドワークの活動に様々な制約を受けることになった。前後の時期の学生も何らかのかたちでコロナ禍の影響を受けているだろうが、フィールドを訪れ、地域住民と交流をしながら活動を始めようとする時期に、コロナ禍の直撃を受け、そもそもフィールドにほとんど行くことができなかつた時期の学生たちはより大きな影響を受けていると考えられる。もちろん休止・中断されたのは現地でのフィールドワークであつて、各フィールドともフィールドワークのための勉強や準備、現地の関係者とのオンラインでの交流等は行われた。にもかかわらず、現地に赴いて地域の方々とともに取り組むフィールドワークが中断した時期の自己評価がこれほど下がっていることは、逆に、学環が準備し展開したフィールドワークの教育効果が高いことを示していると考えられるのではないか。

コロナ禍の影響を除けば、ほとんどの項目で初年度から最終年度に向けて、漸進的に自己評価が高まっている。このことは、2年半にわたり、また複数の学年とともに地域で活動を積み上げ、地域の関係者との関係を深めるようなフィールドワークとなっていることを示唆している。「インタビュー、観察」(問1)、「足りない能力の自覚」(問8)、「地域で活動していく力」(問9)の各項目については、2018年度の自己評価が相対的に高いが、この年度のみ最初2カ所でのフィールドワークを経験していることが影響しているかもしれない。

以上、学生の自己評価という指標に基づくなら、2年半のフィールドワーク経験によって当初設定された目標である「社会人基礎力」に対応した能力は全体として向上していると考えられ、一定の教育効果があったといえる。

2.3. グループ別の集計から

本節ではこれまでの回答をまとめて集計し、傾向をみておく⁴⁾。再度確認しておくが、回答結果は回答者による自己評価であり、各フィールドの環境、課される課題、取り組みの実際、学生間および地域との交流のあり方等はそれぞれ異なり、また個人の感じ方・評価の仕方も様々である。ここではグループ別の回答結果を示すが、もちろんそれはフィールドやコースの優劣を示すものではなく、フィールドワークのあり方と評価を考える手がかりとして扱われる。

〈フィールド別平均〉

自己評価項目問1～問9について、フィールド毎に集計したものが図2 a-bである。16のフィールド別に回答の平均が示されているが、アンケートが実施された3年後期に担当していたフィールドを反映している。

それぞれのフィールドがおかれた状況・事情で回答は変わってくるだろうが、途中で受入れ先や活動が大幅に変更となったフィールド等は、「学生間のコミュニケーション」(問5)、「知見や反省点を踏まえた企画」(問3)、「事前準備」(問4)等の設問で自己評価が低くなる傾向がみられる。受入れ先・フィールドの継続性、学生間の引継ぎの機会の有無が自己評価を左右する要因となることを示唆している。

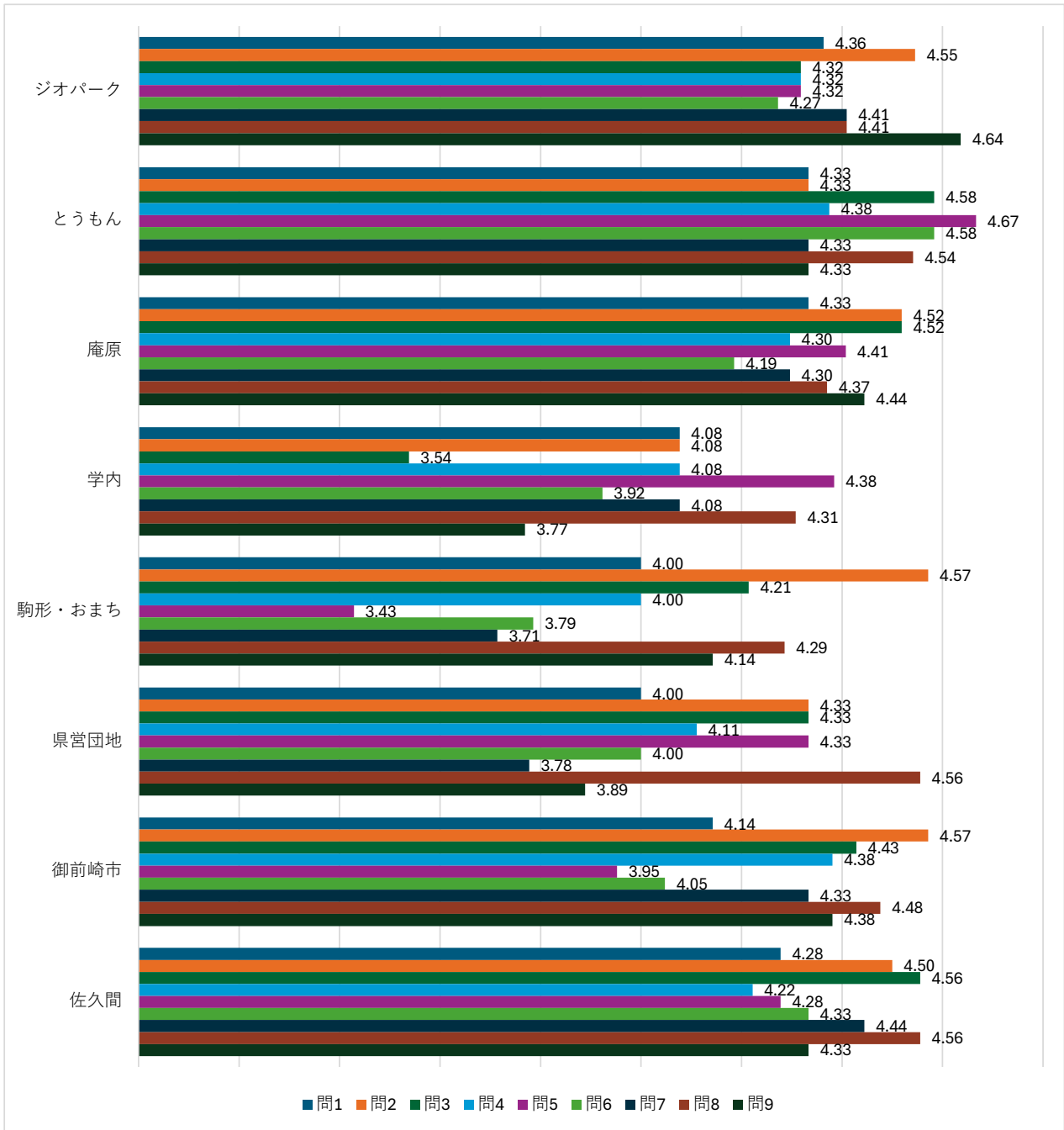


図2a. フィールド別平均

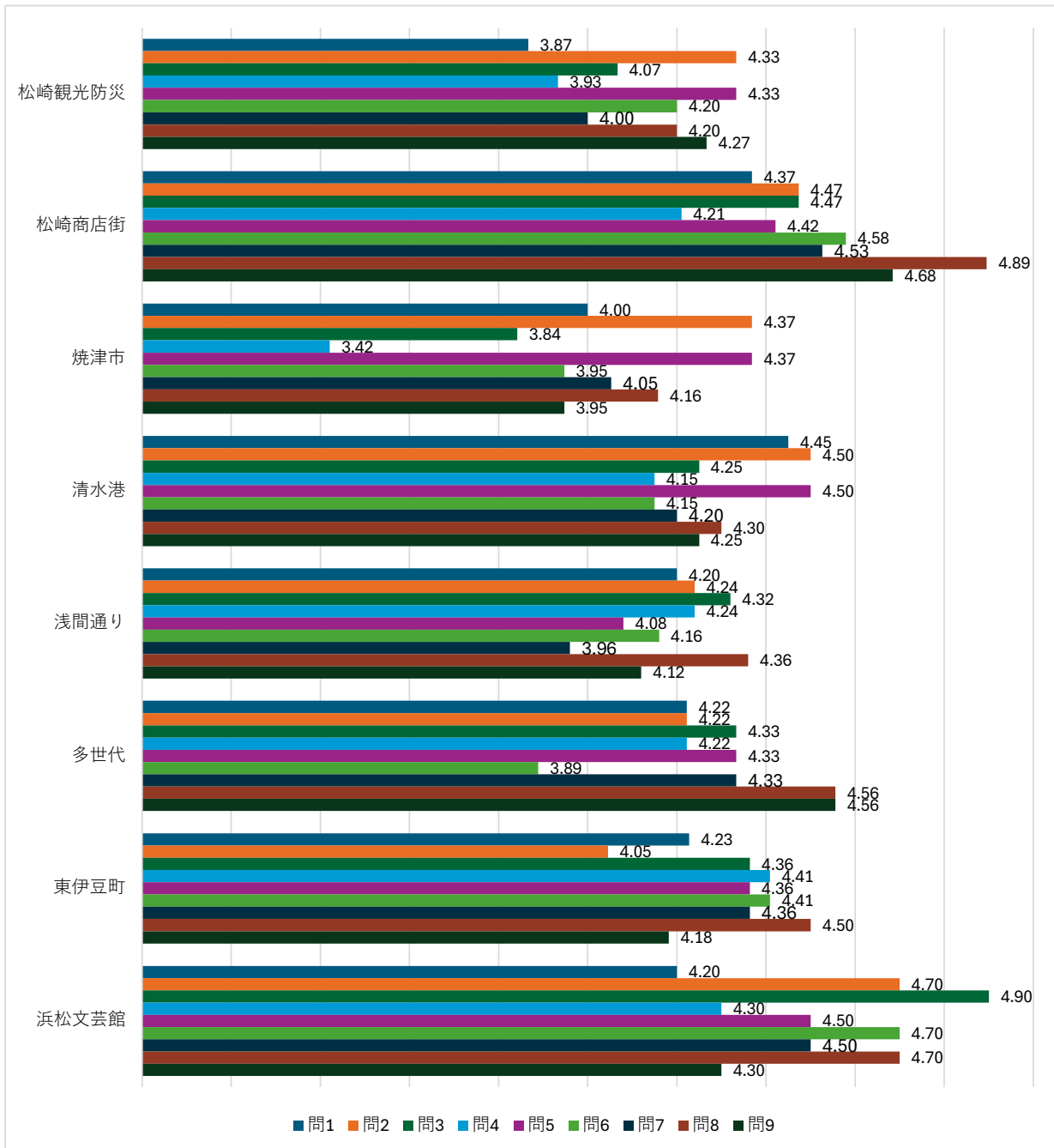


図2b. フィールド別平均

〈コース別平均〉

図3は、地域サステナビリティ、アート&マネジメント、スポーツプロモーションの3つのコース別に自己評価アンケート回答の平均を示したものである。

図において目立った差は、スポーツプロモーションにおいて「学生間のコミュニケーション」(問5)の自己評価がかなり高いことである。スポーツプロモーションの学生でまとまっているフィールドがいくつかあり、フィールドで(またキャンパスに戻ってからも)密なコミュニケーションが取れたという実感があったのかもしれない。

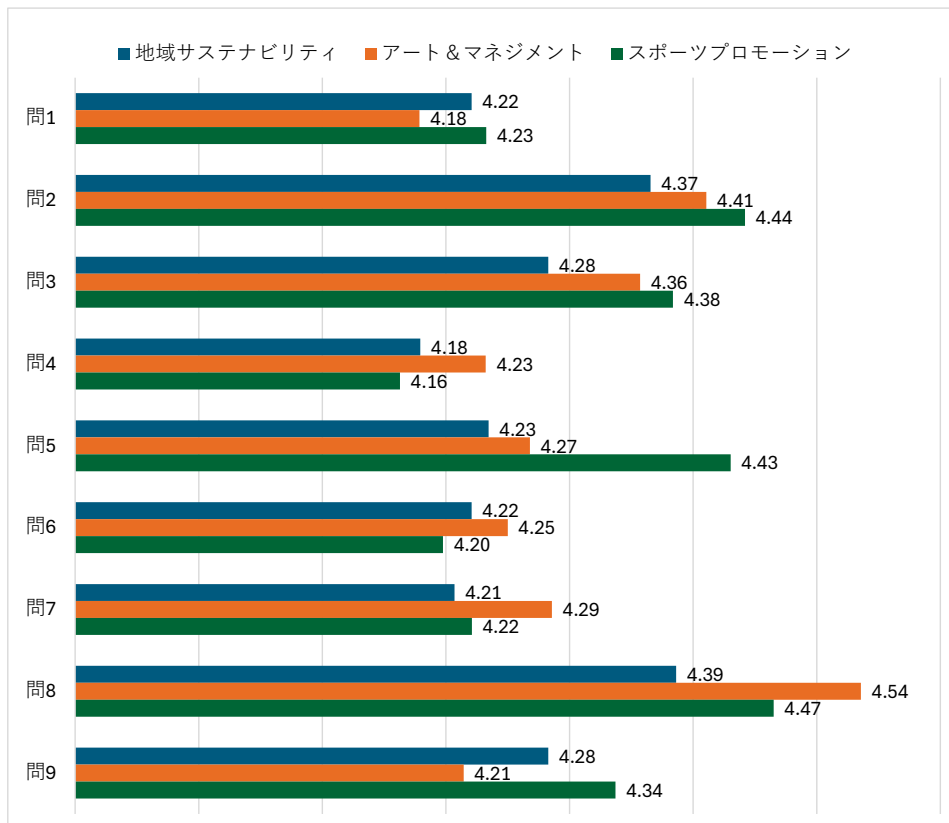


図3. コース別平均

アート&マネジメントにおいては「事前準備」(問4)、「学生の間の役割分担」(問6)、「意見交換や交渉」(問7)、「足りない能力の自覚」(問8)の自己評価が高くなっていることにも注目される。フィールドではそれぞれのコースの属性・能力を活かした活動が期待されるが、特にアート&マネジメントの学生は、フィールドにおいてアートに関わる分野で即戦力として期待され、役割分担をすることが多い。フィールドにもよるが、地域から、また学生仲間から看板、チラシ・ポスター、壁画やライブアートの作成・デザイン等を任される場面が見受けられた。このことが、先の項目群での自己評価の高さにつながっている可能性がある。学環フィールドワークでは様々な知識・能力を持つ学生が連携・協働して地域づくりに取り組むことが期待されているが、そうしたあり方の重要性が垣間見れる結果といえる。

2.4. 因子分析の結果から

フィールドワークの自己評価アンケートは9項目によって測られており、それぞれの項目の相関を示したものが表1である。

どの項目間の相関も高く、互いにかかなり似通った回答傾向となっていることがわかる。それぞれがいかなる内的関連を持っているか、フィールドワークの取り組みに関する自己評価に関してどのような軸があるのかを検討するため、因子分析を行った。

	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9
問1	1	.356**	.354**	.452**	.397**	.347**	.427**	.279**	.435**
問2	.356**	1	.398**	.320**	.237**	.327**	.389**	.263**	.383**
問3	.354**	.398**	1	.435**	.313**	.344**	.434**	.348**	.452**
問4	.452**	.320**	.435**	1	.405**	.440**	.442**	.247**	.324**
問5	.397**	.237**	.313**	.405**	1	.552**	.447**	.215**	.329**
問6	.347**	.327**	.344**	.440**	.552**	1	.423**	.247**	.347**
問7	.427**	.389**	.434**	.442**	.447**	.423**	1	.336**	.472**
問8	.279**	.263**	.348**	.247**	.215**	.247**	.336**	1	.358**
問9	.435**	.383**	.452**	.324**	.329**	.347**	.472**	.358**	1

* < .05 ** < .01 *** < .001

表1. 問1～問9の相関

〈因子の抽出〉

最初に9項目の平均値、標準偏差を算出したのち、9項目に対して最尤法による因子分析を試行した。目安となる固有値1以上ならびに付近の因子に注目し、再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表2に示す。なお、9項目の全分散を説明する割合は55.1%であった。

第1因子は7項目で構成されており、「地域で活動していく能力」「知見・反省点を踏まえた企画」「状況・課題の理解」「足りない能力の自覚」などフィールドとなった地域で活動していくために必要な多様な能力が含まれており性格付けが難しいが、当初目指した社会人基礎力に対応させて、ここでは「地域活動基礎力」因子としておく。

第2因子は「学生間のコミュニケーション」「学生間の役割分担」の2項目で構成されてお

り、フィールドワークで活動する学生の間で意思疎通をはかり、また役割分担をして活動を進めるための項目が高い負荷量を示している。そこで「学生間協働」因子と命名する。

〈コース別、フィールド別の因子得点〉

自己評価アンケートの回答から抽出された2つの因子は、3つのコース、フィールドとどのような関係が見られるだろうか。因子分析のさい、因子得点を算出し新たな変数として保存した。この2因子に対応した変数のコース別、フィールド別の平均をプロットしたものが図4である。

横軸の因子1は「地域活動基礎力」、縦軸の因子2は「学生間協働」にそれぞれ対応している。散布図では大きな差があるように見えるが、それぞれの数値は小さく統計的に有意な差とまではいえない。(男女別因子得点についてもプロットしたが、因子1・2どちらについても値が小さく、原点近くに配置されたので割愛した。) わずかな違いは、フィールドにおける受入れ先・活動の継続性、参加学生の数・多様性、学内外のサポート体制など様々な要因を推測することはできるが、関係者の方々の参考として、フィールドワークのあり方を改めて考える手がかりとしたい。

表2. 因子分析結果

	第1因子	第2因子
	地域活動基礎力	学生間協働
問9 地域で活動していく能力	.682	-.009
問3 知見・反省点を踏まえた企画	.679	-.016
問2 状況・課題の理解	.613	-.047
問8 足りない能力の自覚	.538	-.059
問7 フィールドでの意見交換・交渉	.502	.250
問1 適切なインタビュー、観察	.452	.217
問4 事前準備	.361	.322
問5 学生間のコミュニケーション	-.149	.900
問6 学生間の役割分担	.080	.640
固有値	3.975	.982
因子間相関	1	2
1	1.000	.696
2	.696	1.000

因子抽出法：最尤法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

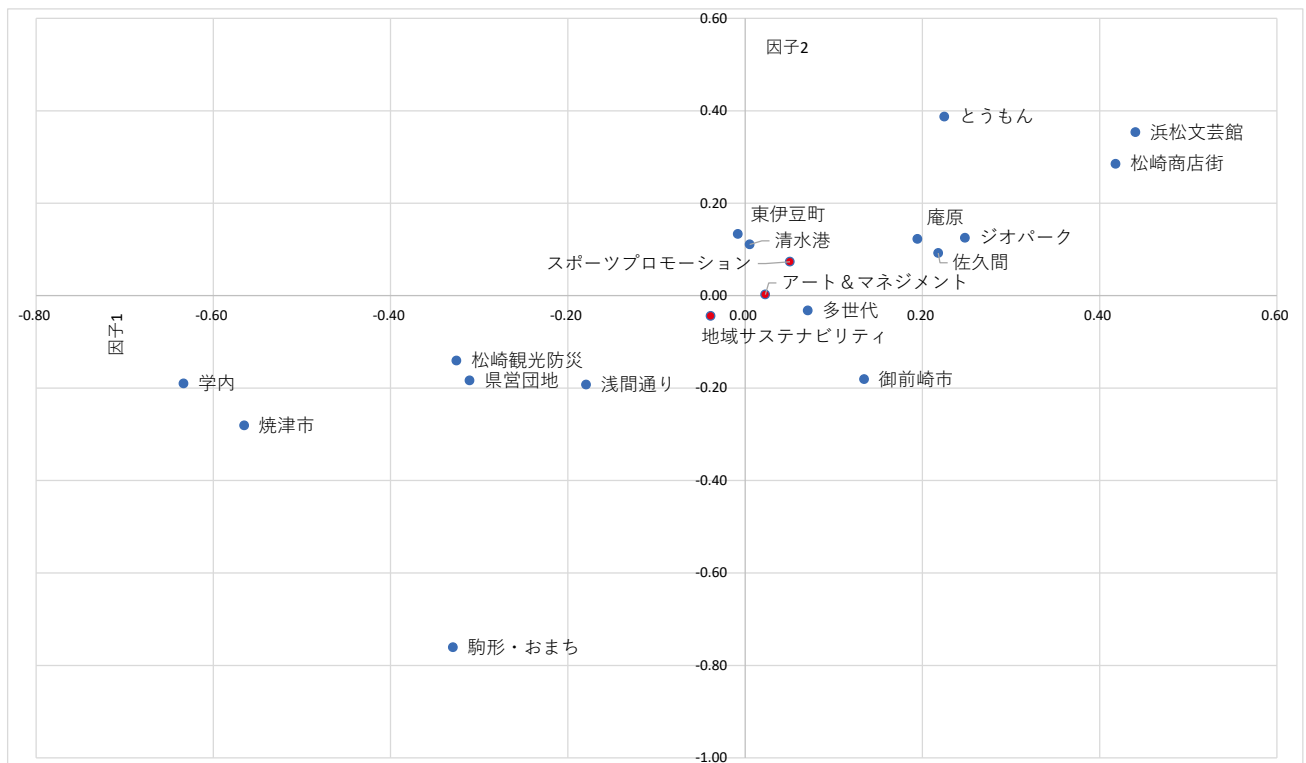


図4. コース・フィールド別の因子得点分布

2.5. まとめと補足

自己評価アンケートを手がかりにフィールドワークの教育効果を探ってきたが、2年半にわたるフィールドワーク経験により地域で活動するための能力が向上したという学生の自覚を生んでおり、一定の教育効果が確認されたと考える。学生の自己評価がコロナ禍による中断の影響が大きい年度には下がるが、基本的には年度が進むごとに漸進的に向上するという7年間の推移は、1つのフィールドで継続的にまた複数の学年とともに活動を進めるという基本的なプログラムデザインが効果的で、またそれによって地域の方々と密に関わりながら活動を展開し、成果・課題・関係性を引き継ぎ、積み上げていくフィールドワークの具体的な進め方が、教育効果をもたらしていると判定してよいのではないかと判断している。

しかし何度か確認したように、取り上げたデータは学生による自己評価アンケートの回答であり、フィールドワークの教育効果を検討するさいの間接的な指標の一つに過ぎない。教育効果の評価としては、担当教員による各期（FW I～FW III B）の成績評価もあるが⁵⁾、評価基準は共有されているものの全フィールドでの活動を眺めた上で学生を評価するわけではないため、こちらも評価指標としては限界がある。

フィールドワークの教育効果を測るのに、非常に重要となるだろう視点が2つ考えられる。学環フィールドワークが地域の方々と交流しながら、地域の課題や資源を発見・探求し、ともに解決に取り組むことを目指しているとするなら、地域側からの評価視点が欠かせない。地域の受入れ担当者および関わってくれた住民による評価である。フィールドワークでの活動を地域の関係者がどのように眺め、評価しているかはあらゆる機会に収集すべきデータであろう。その点で毎年度開催されるフィールドワーク報告会ならびにフィールドの受入れ担当者が委員として参加される地域連携会議は、非常に重要な場である。

もう一つは、地域や社会で活動する卒業生による自己評価という視点である。こちらは組織的に収集することが難しい評価指標であるが、人材育成を担う大学にとって最重要の評価であるといえる。その意味で、2025年12月20日に開催された2025年度フィールドワーク総括フォーラムは、貴重な機会となった。印象的だったのは、卒業生パネリストが、フィールドワーク中はその意味・意義が理解できなかった課題や経験が、卒業後の自分にとって非常に重要な役割を果たしていると述べたことであった。当然ながらこの観点は3年後期のアンケートでは測ることができない。そうした経験は多くの卒業生にもあると推測され、様々な教育プログラムを進める大学にとって重要な知見となるだろう。何らかのかたちでの「卒業後の自己評価アンケート」の実施を期待したい。

3. 地域—大学へのインパクト

学環フィールドワークは、大学がフィールドで何ができるかという地域社会への一つの問いかけであるが、地域ではすでに大学への様々な要望や働きかけがされており、それらに対する大学からの応答として期待されるものでもあった。本節では、フィールドワーク開設までの大学の動きと地域社会からの期待に注目しながら、地域—大学へのインパクトを検討する。

3.1. 学環フィールドワークへの期待

学環は学部ではなく、地域づくりに貢献できる人材を育成することを目的とした学部横断型の教育プログラムである。教育プログラムとして立ち上がった後、学環が配置されたのは、新に改編された地域創造教育センター（以下、前身の組織も含めセンター）であった。もともとセンターは、公開講座や市民開放授業等の大学開放事業を担当し、地域との連携・協働を進めながら人材育成を行う組織として設置された。そのさいに、地域社会から大学へどのような期待がされているか、どのような連携・協働を進めれば地域社会に貢献できるかを模索しながら活動を進めてきた。その方向性の中で、新たに立ち上がった学環フィールドワークも位置づいている。

学環フィールドワークによる地域—大学へのインパクトを検討するにあたって、ここではまず、地域において大学がどのような役割を期待され、どんな連携・協働を要望されているかをみていく。

図5は、地域社会からの大学への期待（それと対比して大学が考える地域貢献）に関する調査結果である（104大学、160市町村のデータ）。図にみるように、市町村が大学に期待することの第1位は「学生の社会貢献活動を推進」というある意味意外な項目であった。それまでは、実践に役立つ専門的知識・技能を有する人材養成、研究成果を分かりやすく住民に公開することなどが重要と考え活動を進めてきたが、市町村からの期待の焦点は違った局面に当てられていた。



図5. 地域から大学への期待⁶⁾

この結果を踏まえ、文科省が全大学に対して実施する「開かれた大学づくりに関する調査」の際、「学生の社会貢献活動を推進する」という項目を新たに入れてもらった(図6参照)。全国の大学の9割近くが「学生の社会貢献活動を推進」することを重視しているものの、実際に取り組んでいるのは6割強という状況が確認でき、そうした活動が活性化する環境・仕組みづくりの重要性を認識した。

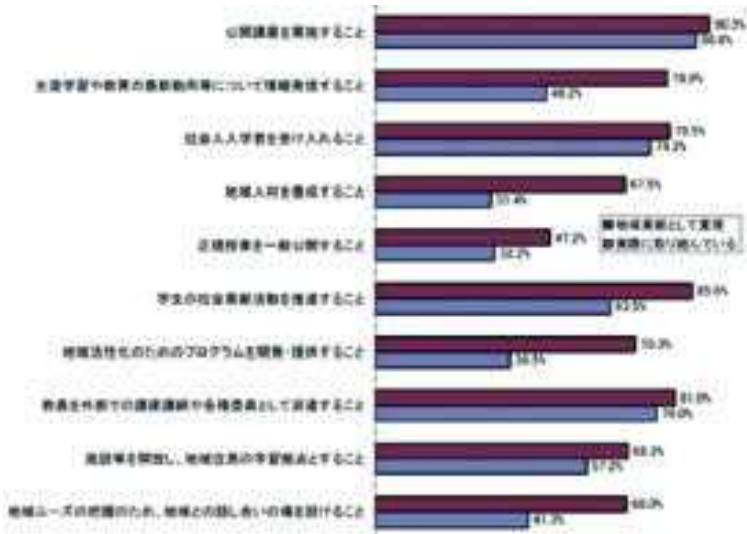


図6. 地域社会に対する大学の地域貢献項目⁷⁾

3.2. 地域課題に対する大学の取り組み

センターではこれらの結果を受けて、2011年より学生と教職員が地域と連携して地域の課題解決に取り組む「地域連携応援プロジェクト」を開始した。これまでの15年間で250を超える応募があり190件が採択され、ほぼ全てのプロジェクトにおいて学生が中心となって取り組んでいる。このプロジェクトによって多くの地域との連携・協働が進み、学環フィールドワークにつながるネットワークも生まれた。

地域連携応援プロジェクトはしかし、基本的にはすでにある地域との関わりの中で生まれた大学発の取り組みであり、1年を単位とした事業である。地域—大学連携をさらに進めるため、地域の視点での課題提案を募集し、その地域に学生・教職員が入り継続的に課題解決にあたる事業「地域課題解決支援

プロジェクト」を2013年に立ち上げた。これに対し、1期2期を合わせ44件の課題が寄せられたが、そのうちの18件は松崎町、東伊豆町などこれまで大学との接点があまりなかった伊豆半島（特に賀茂地域）からであった。賀茂地域は、県内でも最も人口減少・過疎化が進み、若者世代が流出する状態が続いている。それと同時に、ジオサイトや歴史文化遺産等の地域資源も多く、それらを活かした地域課題解決への取り組みを要望していた。

伊豆地域から提案された主な課題は、「防災と観光の融合」「商店街の魅力発掘とにぎわい創出」「交流拠点の利活用」「棚田保全と地域ブランドの確立、伝統芸能保存」(松崎町)、「エコガイドシステム構築に係る研究」「観光資源の開発・利活用」(東伊豆町)、「伊豆半島ジオパーク進捗管理のための評価指標および調査方法の確立」「ジオサイトの有効活用」(伊豆半島ジオパーク推進協議会、伊豆を愛する会)等であり、その多くが学環フィールドワークで取り上げられている。フィールドワークが地域にもたらしたインパクトは様々なフィールドであるだろうが、ここでは賀茂地域のフィールドの事例を取り上げながら検討する。

3.3. 松崎町における取り組み

静岡新聞2015年2月12日付の記事にみるように、地域課題解決支援プロジェクトが松崎町で本格的に始まったが、自治体の担当者が期待した満足度が高かったのは、教職員だけでなく学生が参加・参画する取り組みで、住民と交流を深めながら一緒に地域課題について考え、行動する連携・協働のあり方だった(2015年2月12日付静岡新聞朝刊記事「連携の在り方探る 地域課題解決へ活動—松崎町と静岡大」)。

数回で終わる事業ではなく、複数の学生が町に入り継続的に取り組むことを強く願い、そのための環境づくりに尽力されたのが、課題提案者であり当時は町の職員だった深澤準弥町長だった。

学環が開設され、フィールドワークの企画が立ちあがった時、受入れ先としてまっさきに手を挙げたのは松崎町であり、しかも複数のテーマ/コース(商店街、観光・防災、加えて伊豆半島ジオパークの各コース)が展開されるフィールドとして受入れ/サポートをいただいた。フィールドワークが始まってからも、町内の様々な課題と資源、キーパーソンを紹介し、松崎高校・中学校などともつなぎながらフィールドワークの環境を整えた。

フィールドワークの成否を左右するのが、①地域の課題意識の深さ・真剣さ、②大学側の学ぶ姿勢、学生・教職員の当事者意識、③地域の諸要素を結びコーディネートする人材、④それらをサポートする行政、だとすると、松崎町にはそうした要素が揃っていた。

地域からの手厚いサポートを得て始まったフィールドワークだが、学環生が地域に入り、様々な住民と交流しながら取り組みを進めることで、大人も子どもも、また地域も変わったとの評価を得た。取り上げた地域課題が次々と解決していったというわけではもちろんないが、ともに課題に取り組む大人が、高校生、中学生が増えていった。学生と関わることで大人も背伸びをしながら地域のことを改めて考えるようになる、高校生が大学生とともに探究学習や空き店舗改修プロジェクト等で地域づくりを進める、こうした変化を生み出すインパクトを地域に与えている。その中で学生が学び、育っていくという循環がみられた。フィールドワークのサポーターをしてくれた松崎高校の学生が卒業後、教育学部や学環に入学し、地域の活性化や地域教育の担い手を目指す事例がある。静岡新聞2023年11月30日付の記事では、フィールドワークやそこから派生したプロジェクトに参加したことで、地域づくりに関心を持ち、進路

を変えた松高生が紹介されている（2023年11月30日付静岡新聞朝刊記事「空き店舗を活用して住民の交流拠点づくりを進める 藤井天汰郎さん」）。

学環の目標は地域づくり人材の育成であり、フィールドワークを通してその目標にアプローチしていく。しかしこうした事例をみると、フィールドワークを通じて地域づくり人材となっていくのは学生だけではなく、フィールドで交流しサポートしてくれた地域の大人や子どもたちも「地域づくり人材」となっていく局面がある。

松崎町では深澤町長をはじめ多くの方が学環フィールドワークやプロジェクトを評価し総合計画にもそれを記載しているが、フィールドワークをきっかけに関わった地域の方々が地域づくりに意欲を示し参加・参画したとすれば、そのことも地域への重要なインパクトであると考えられる。

3.4. 東伊豆町における取り組み

東伊豆町でも地域課題解決支援プロジェクトが立ち上がり、学環設置前の2016年2月に地域課題をテーマとした公開シンポジウムを開催した。東伊豆町をはじめとした賀茂地域の行政・教育関係者、地域住民に対し、平岡学環長が地域創造学環の理念・趣旨を報告し、パネルディスカッションには、当地で「空き家改修プロジェクト」を展開していた芝浦工大院生の荒武優希氏が参加していた。卒業後、地域おこし協力隊として東伊豆に移住し、NPOローカルデザインネットワークを立ち上げていた。学環フィールドワーク開始から1年遅れの2017年からは東伊豆フィールドワークが開始されたが、その受入れ担当者となった。学生の立場で様々な活動を展開してきた経験を活かし、フィールドワークの可能性を拡げるような様々な取り組みを進めていただいた。

東伊豆町には芝浦工大をはじめ多くの大学が入り、様々な地域課題に取り組んでいた。学環フィールドワークもその中に入り、ネットワークの中で地域づくりに取り組むことができた。NPOローカルデザインネットワークがコーディネートした東伊豆未来会議や東伊豆学生サミットは、そのためのプラットフォームとして機能し、大学だけでなく地元の稲取高校等も巻き込んだ活動を展開していた。

地域の様々な主体との連携・協働はフィールドワークの目標の一つだが、大学・高校間ネットワークへの参加・参画は学生に対し優れた教育効果をもたらした。また、フィールドワークをきっかけに稲取高校が静岡キャンパスを訪問し、学環生だけでなく様々な学部の学生とも交流する事業は恒例化し、地域との連携の新たなかたちとして大学にもインパクトを与えた。

学環フィールドワークならではの貢献として、地域との共創の中で様々なアート（看板・壁画・ライブアート等）をまちの風景として付加したこと、ワークショップ等でのコーディネート・ファシリテート、首都圏の高校との合同フィールドワークや中高校生との交流でのエンカレッジメント等が評価され、地域へのインパクトとなった。

フィールドワークが継続する中で、卒業生が東伊豆町に戻り、後輩のフィールドワークの指導役やサポーターとなるケースも複数例あり、特徴となっている。フィールドワーク総括フォーラムのパネリストの梅田さんのほか、域外の企業に勤めながらサポーターとして活躍した星野君などがフィールドワークを支援してくれた。梅田さんや星野君のケースは、フィールドワークにおいて地域に支えられた側が、地域に戻り支える側に回るという循環を示している。フィールドワークでは地域の様々な主体との横の連携が重視されるが、フィールドでの活動が継続し、引き継がれる中で支えられた者が支える側になる、いわば縦の接続が生まれるとしたら、それも非常に重要なインパクトであると考えられる。

ここでは2つのフィールドしか取り上げられなかったが、これまで述べたインパクトや視点はどのフィールド、フィールドワークでもかたちを少しずつ変えながらみられるものである。フィールドの中で、地域との継続的な関係の中で育まれた成果は、学環フィールドワークならではの地域—大学のあり方から生まれていると考える。このことが大学への最大のインパクトであり、学環が閉じたあと、後継の組織で、また新たな取り組みで、何らかのかたちで引き継いでほしい核心である。

¹⁾ 平岡義和、2022年、「地域創造学環のフィールドワーク—立ち上げ、現状、課題—」、『静岡大学地域創造教育研究』第3号、11～19頁。

²⁾ そのため、2018年度に自己評価アンケートを提出した1期生のみが2地域でのフィールドワークを経験するという変則的な状況となった。

³⁾ 平岡 2022 p.15.

⁴⁾ 学術情報システム上の回答データにない2018年度分を除き、2019～2024年度分計287件を集計・分析した。

⁵⁾ 平岡、太田によって成績と自己評価の相関が取られており、年度によって差はあるが、相関はおおむね弱いと判定されている。

⁶⁾ 出典：文科省委託研究「大学と地域の連携によるまちづくりに関する調査」2004。

⁷⁾ 出典：文科省「開かれた大学づくりに関する調査」(2011年度)のデータから筆者作成。

V. 静岡大学地域創造学環フィールドワーク総括フォーラム

～地域・学生・教員が集い、振り返る～ パネルディスカッション 報告

日時：2025年12月20日（土）

会場：グランシップ 会議室1001

パネリスト ※50音順

- 酒井 政幸氏（清水区 いはら道の駅プロジェクト・企画委員）
 名倉 光子氏（NPO法人とうもんの会・理事）
 深澤 準弥氏（松崎町長）

【地域創造学環 卒業生】

- ・梅田 留奈（2020年度卒・東伊豆町地域おこし協力隊）
- ・上田 啓瑚（2020年度卒・防災科学技術研究所研究員）
- ・齋藤(赤池) あい（2021年度卒・御前崎市役所）

司 会

太田 隆之（静岡大学地域創造学環 副学環長・フィールドワーク総括ワーキング座長）

趣旨

2016年度後期から始まった地域創造学環のフィールドワークは、2024年度をもって終了した。学生たちがこれまでの9年間に学んだフィールドワークによって地域にもたらした影響、または学生たちが現在どう活かしているのかについて卒業生と地域の方を交えて意見交換を行った。

当日のプログラム

【司会・進行：静岡大学地域創造学環フィールドワークオフィス 中安章江】

開会挨拶	塩尻信義（静岡大学副学長／教育担当理事）
学環の説明	太田隆之（静岡大学地域創造学環副学環長・フィールドワーク総括ワーキング座長）
今回の企画の趣旨説明	
卒業生の自己紹介	卒業生代表者 3名
地域の方の自己紹介	地域の方 3名
ディスカッション	

パネリスト・自己紹介

■ 地域創造学環 卒業生

【梅田 留奈（東伊豆フィールド）】

私は東伊豆フィールドに所属していました。卒業後は東京の広告会社で3年間勤務し、その後、フィールドワーク先だった東伊豆町の地域おこし協力隊として活動しています。現在は、伊豆稲取駅前で「まちのレセプション ようよう」を地域の方や会社と連携して運営し、観光案内・カフェ・物販、町歩きマップの制作、学生支援企画、オリジナルグッズ制作などに携わっています。個人ではデザイナーとして、移住定住冊子や地元事業者のパンフレット、イベントのフライヤーなども制作しています。

在学中のフィールドワークでは、「人が行きかう稲取」を掲げ、関係人口を「UCHIRA」と呼んで増やすことを目標にしました。交通や名物など自分たちだけでは作れない要素は地域の方に頼り、私たちは仲間づくりに注力しました。具体的には、1年目にフォトコンテスト「ハートプロジェクト in 東伊豆」、2年目に「雛フェス」への出店とライブペイント・ワークショップ、3年目に町をゲーム形式で歩くロゲイニング「イナトリクエスト」を実施しました。

学生時代の取り組みでつながった縁が、今も地域の中で続いている実感があります。地域おこし協力隊として活動している現在、「あの時の学生だよ」と声を掛けていただくことが多く、企画を媒介にコミュニティが続いていく未来が少しずつ形になっていると感じています。

【上田 啓瑚（伊豆半島ジオパーク／防災）】

私は2020年度卒で、現在は筑波大学博士課程に在籍しつつ、防災科学技術研究所の研究者をしています。学部在学中から地域防災・防災教育に関心を持ち、伊豆半島ジオパークの保全と防災をテーマにフィールドワークに参加しました。

最初は、Arduinoを使った人感センサーや獣害対策の装置を自作し、ジオサイト来訪者の観測や地域の課題把握を行いました。2年目以降はメンバーが増え、西伊豆地域での津波防災のまちづくりに取り組みました。高校生やジオパーク推進協議会、役場の皆さまと連携し、避難経路のマッピングやドローンを用いた地形観測、津波避難訓練の実施など、実践と検証を重ねました。

この過程で、自分に足りない視点や技術を強く自覚し、3年次の夏に防災科研でインターンを経験しました。その縁が現在の研究職につながっています。もともと第3希望で入ったフィールドでしたが、人生の方向を大きく変えた重要な出会いになりました。実装の現場で得た「地域とともに設計し、評価して改善する」プロセスは、今の研究でも核になっています。

【齋藤（赤池） あい（御前崎フィールド）】

私は地域経営コース出身で、御前崎フィールドに所属していました。御前崎市の出身で、ちょうど自分の代から新しく御前崎フィールドが始まることになり、地元で学びたい思いから参加しました。現在は御前崎市役所 教育委員会 社会教育課で、生涯学習の推進、青少年体験授業、20歳のつどいの企画などに携わっています。

フィールドワークの初期は現地調査と聞き取りから始め、観光の閑散期である2月と9月に、大学生

の視点から魅力を伝えるイベントの可能性を検討しました。2年次はマリンスポーツフェスタでの運営参加とアンケート調査、合宿型の体験学習で滞在型の魅力を検証。3年次には、町内を巡りポイントを競う「おまえごきサイクリー」を実施しました。コロナ禍で現地に行けない時期が長く続きましたが、感染対策に配慮しながら学生主導での実施にこぎ着けたことは大きな学びでした。

地元行政で働く今、当時の経験は企画の設計、関係者調整、住民との対話に直結しています。地元を外から見直す視点と、やってみて検証する姿勢を学生時代に獲得できたことが、実務の基盤になっています。

■フィールドワーク協力先

【酒井 政幸氏（清水いはら道の駅プロジェクト／庵原フィールド）】

私は清水ナショナルトレーニングセンター（当時）で、スポーツを地域振興につなげる取り組みを進めていました。Jリーグキャンプ時のマルシェなど、スポーツ観戦と地域物産を結び付ける実証の場をつくり、その流れから庵原フィールドで学生さんと一緒に活動しました。

コロナ禍では、学生さんが健康チェック・体力測定・運動・食事を一体にした企画を提案し、ストレス発散の視点まで含めて設計してくれました。こちらでは思い至らなかった観点で、非常にありがたかったです。さらに、地域ワークでは学生がファシリテーターを務め、住民と議論を進めて「記録（ログ）」まで整えてくれました。道の駅の実証イベント「清水いはらフェス」でも、現地下見から案内、ノルディックウォーキングの指導、動画やポップ制作まで、幅広く動いてくれました。

学生が主体的に地域へ入り、頼られる存在になっていく過程を見ました。ロゴマークの制作など、今も地域に残る成果もあります。卒業後も、スポーツ団体や研究機関、プロ野球選手など、それぞれの道で活躍し、現場に還流してくれていることが嬉しいです。学生と地域が共に汗をかく体験は、確実に人と地域に残ります。

【名倉 光子氏（NPO法人とうもんの会／とうもんの里フィールド）】

私は「おかん」と呼ばれることが多いのですが、若い人たちにおせっかいをするのが私の役目です。フィールドワークでは、夕食を一緒に作って食べることで、生活の場を共有しました。1年生には「光子の部屋」と称して個別面談をし、「なぜ静大なのか、なぜとうもんなのか、どう生きたいのか」を丁寧に聞き出しました。そして、「どんな選択をしても、後悔はある、だから自分で決めること」ということを伝えています。

農村の現場では、予定外の出来事がつきものです。子どもとの水遊びで、ずぶ濡れになり、地域の方の浴衣を借りて町を歩いたこともありました。お寺の宿泊では、檀家さんとお寺の行事等に参加しました。とうもんの自然の中で話すことでアイデアが生まれる、という感覚を学生がつかんでくれたのは、とてもうれしい出来事でした。

フィールドワークで関わった40人の学生は宝物です。困ったらいつでも戻っておいで、光子の部屋は無期限です。人の夢を後押しするのが「おかん」。人脈で背中を押すのが私の役割だと思っています。

【深澤 準弥氏（松崎町長／松崎町フィールド）】

私は松崎町で生まれ育ち、役場職員として長く勤め、現在は町長を務めています。静岡大学とは、社会教育主事の講習を通じてつながりができました。課題の総合百貨店と言われるほど課題が多い小さな町に、学生を受け入れる意味は大きかったと思います。

フィールドワークを受入るときに私が心掛けたのは、学生を地域の人につなぐ伴走役です。大学生が町を歩く姿は珍しく、商店街の皆さんも少し格好を付けて迎えてくれました。結果として、自分たちの足元を見直す契機になりました。秋祭りの片付けを手伝ってもらった時、地域の人たちの表情が変わり、「祭りを続けなければ」という空気が生まれました。防災でも、避難訓練のマンネリに対して学生がアイデアやマップを提示し、住民の当事者意識を高めました。

学生が外から来て町のことを一生懸命考える姿は、地域に刺激と誇りをもたらします。肩書を離れて人と人として付き合える時間を大学が作ってくれたことに感謝しています。課題は多いですが、少しでも明るい方向へ進むために、これからも大学と地域の連携を続けていきたいです。



パネルディスカッション

◆フィールドワークの活動の在り方、印象、感想（卒業生）

梅田：私のフィールドワークの感想としては、すごく楽しかったです。フィールドワークに関わって、フィールドワークができて本当によかったと今すごく思っています。私はもともと全然地域に興味がありませんでした。私はアート&マネジメントの、特にデザインを勉強したくてここを希望したので、デザインの勉強をメインでしたいけれど、フィールドワークは必修だし、まあ行くかという感じのテンション感で正直最初はいました。

ただ、実際に今は本当に楽しかったし、やって良かったなと思っています。そう思っているのは、当時地域おこし協力隊をされていた荒武さんだったり、商工会の方だったり、役場の方だったり、それから地域の方々が本当に温かく受け入れをしてくださったことで、私たちがやりたかったこと、やりたいと言ったことをすべてサポートして実現させてくださった経験があって、すごく楽しいフィールドワークだったと思っています。

地域おこし協力隊になって、地域側の人間としてフィールドワークを思い返した時に、当時私たちを自由にしてくれた大人のように私は学生を自由にさせてあげられないのではないかと思います、私たちを受け入れてくださった地域の大人の方々が、どれだけ自由度が高くて本当にありがたいことをしてくださっていたのかとあらためて今感じています。

フィールドワーク活動を振り返って、今社会で求められていることをフィールドワークで学べたのではないかと思います。地域に入り込んで地域の課題を見つけて課題を解決していくという、今は社会の変化が激しくて混沌としたVUCAの時代とよく言われると思いますが、その中で何が課題なのかがそもそも分からない地域だったり、会社さんだったり、事業者さんがすごく多いと思っています。

何が課題なのか分からない時代の中で、私たちはフィールドワーク先に2年半継続的に関わり続け、実際に地域の方と会話して町を歩いて町を知ることができました。そして、自分たちなりに課題を見つけ、解決に向けて動く経験ができたことは、貴重な経験だと思っています。

私はフィールドワークがあって東伊豆に初めて訪れて、東伊豆を好きになって、ご縁があって今移住をしている形なので、地域創造学環があってフィールドワーク先が東伊豆だった、本当にそれが今の私を作っていると思っています。

上田：フィールドワークで印象に残ったことと感想、今の立場、役立っていることで、私のフィールドワークはなかなか特殊なところかなと思っていて、地域にどう関わるのか、まず地域を地質的なところから知るといことで、それが今も知識として大変役立っていると思います。

具体的には、ジオサイトなので地質的な要素を、例えばここまで溶岩が流れてきた、ここは何年代の地質で、石を見るとこれは伊豆石だ、これは花こう岩だ、これは堆積岩だと、いろいろな石を見て石にも大変魅力があったり、地域の魅力としてそれもすごく大事にされているのも実感しましたし、そういった要素の基礎的な素養もフィールドワークを通して学ばせていただきました。毎月伊豆に行かせていただきまして、まさにFW担当教員の小山先生の「ブラタモリ」を毎週見ていたかのような時間でした。今思うと贅沢だったと思っています。今防災教育を行う上で当時得た知識が大変役に立っているところです。

また、地域に毎月伺い、フィールドワークでジオパークの方々や地域で活動されるボランティアの方、自主防災会の方々、また行政の西伊豆町の方とも連携をさせていただきました。そのような地域のキーパーソンの方と交流できたり、コミュニケーションを取れたりしたことは大変貴重な機会です、その後は私が社団法人で行っている取組み等でも連携させていただいているところです。

津波避難の取り組みを松崎町の松崎高校と一緒にやらせていただきました。西伊豆は高齢化が進んでいるところで、スマホで地図を開くことができない方が多いので、高校生と一緒に入ってもらって、高校生がスマートフォンを持ってその相手をしました。おじいちゃん、おばあちゃんと高校生が歩いて「ここは危ないね」とコメントしていたり、避難経路を一緒に確認していきました。その取り組みを西伊豆町の津波防災地域づくり推進計画の中に入れていただいて、当時西伊豆町の防災担当の方で、今は静岡県危機管理課にいらっしゃるのですが、今も一緒に勉強させていただいて、一緒に取り組みをさせていただけるのは、ご縁をフィールドワークで頂いたからだと思います。

そのような企画力や高校生との連携、それからデジタルの使い方についてフィールドワークを通して学ばせていただいたと思っています。

今の職業にどう生かしているか、生きているかですが、このような基礎的な地域の入り方や地域でのアクションリサーチなど、地域を回りながら一緒に地域の方と協力をしてこのような研究を進めていくのは私自身も初めての経験でしたけれども、この経験が今の研究の基盤につながっていると思っています。

先ほども紹介しましたがけれども、実際にこれを使った地域防災Webをインターンシップで勉強しにいて、現在は地域防災Webの主担当として研究開発をしている立場になりまして、まさにこのような現場の課題を把握しつつ、今は運用、研究開発を実装していく立場として引き続き寄与しています。防災科研のYouTubeには地域防災Webの紹介動画が出ていますので、ご覧いただけたらと思います。

その後慶應に行きまして、今筑波にいます。たくさんのフィールドワーク先候補があり、たくさんの魅力があるというのは、静岡ならではの特色であり、皆さまのご協力、そして静岡の人の温かさがあってフィールドワークが成り立っていたと改めて感じました。関東ですとなかなかフィールドワークに行ける場所がたくさんあるわけではありませんし、魅力があるところも限られてくるので、これだけ魅力があってさまざまな課題がある、そこに一緒に入らせていただける環境があることが本当にありがたかったと今改めて感じています。

齋藤：フィールドワークに入って、先ほど先輩方がおっしゃっていたように、自分たちのやりたいことを形にできる環境は本当にありがたかったと思います。地域に出ても大学生だからというところで、

「ちょっとこういうのは無理だよ」と、まずはなかなか話を聞いてもらえない状況もある中で、大学生の立場から「ちょっと聞いてみようかな」と言ってもらえるという、この時期だからこその活動は本当に大切だったと思います。

また、大学の中にいると先生方とは関わりますけれども、地域の方とは意識して関わっていかないとそういう場はなかなかなく、その後社会に出ていきなりいろいろな方と関わる状態になると思いますけれども、このフィールドワークを通して地域の方、行政の方など、本当にいろいろな方と関わらせていただいて、社会勉強的なところもあったと思っています。

外との関係だけではなくて、学生間の調整もすごく学べたと思っています。私たちの時は5コースあった時だったので、いろいろなコースの人たちが集まって一つのフィールドワークで活動していたのですが、常に一緒にいるメンバーではないので、意識の共有が難しい部分もありました。実際に今働いてみると、いろいろな部署で働いている人たちで一つの目標に向かって取り組むことは本当にいろいろなところであるので、そこでも横のつながりを学べたと思っています。

あとは、先ほどお話をした大学生ならではだと、失敗がある程度許してもらえるというこの立場はすごくよかったと思っています。今の自分たちだと、これをやるとこういう失敗が考えられたり、どうしてもそこに目が行きがちですが、大学生の時は提案したら受け入れてくださる大人の方たちが「ちょっとやってみたらいいのでは？」と言ってくれていました。それでうまくいかないこともありましたが、失敗したから次回はこうしようという経験を積めたことも大きかったと思っています。

フィールドワークで学んだことで今一番生きていると感じているのは、現場をしっかりと自分の目で見ることだと思っています。自分の目で見ることで、そこには地域の方たちもいて、そこで関係性ができました。今はネットでいろいろな情報が見られる社会で、もちろん行かなくてもいろいろな情報を得られますけれども、行くからこそ生の声が聞けたり、温度感などネット上では載ってこない情報まで得られるのはフィールドワークの強みで、仕事ではどうしてもデスクでできる仕事が多くなるのですが、しっかり現場に行って地域の方とお話することをフィールドワークでたくさん学べたと思っています。

太田：ありがとうございました。先ほどの自己紹介からの延長線上の話ではありますが、新しいこともお話をいただけたと思います。



◆フィールドワークの活動の印象、感想（フィールドワーク協力先）

酒井：私の自己紹介の中でもありましたが、もともとスポーツ施設にいて、スポーツ施設だけではなく、地域振興、地域貢献の取り組みをしていたところではあったのですが、道の駅プロジェクト・構想もありましたし、ミカン、お茶をどのように盛り込んでいこうかといろいろなことを皆さん考えていました。そこにちょうどフィールドワークで学生の皆さんが入ってきて、協力をしてくれました。その点ではそこをつないだだけの私だったのですが、すごくいい形で進んでいってくれたので、それを受け入れてくれた地域の皆さまには本当に感謝しかないです。すごく学生の皆さんに対して温かく接してくれましたし、本当に教えてくれてありがたかったと思います。

当初、学環長だった平岡先生ともお話をさせていただいた時に、地域に貢献できる人材の育成や人間力というワードがすごく耳に入ってきた記憶があります。今皆さんおっしゃったように、実際卒業して社会に出て地域の方と接し、いろいろな話をするのがすごく役立っていると思います。学校を卒業していきなり社会に出て行って就職してというと、なかなか戸惑うこともあるとは思いますが、フィールドワークの中で地域の方、いろいろな方と知り合い、つながりができ、課題の解決と一緒に仕事を協働していくことは、今就職して、社会に出てからすごく役立っているのではないかと、そういう意味ではとてもよい学びであったと思っています。

名倉：最初に梅田さんが私は地域が好きではなかったと、私はアートだからフィールドワークは適当にやって、アートの世界に進みたかったのだと多分思います。うちのところで受け入れた人も1人そういう方がいました。でも、無理もないです。彼女は高校生の時にプロの漫画家としてデビューをしたので、物足りなさを感じていたのだと思います。でも、その彼女にとうもんの看板を作ってほしいといった時に、本当に力を発揮してくれて、すてきな看板を作ってくれました。今10年近くになりますが、とうもんの入り口、いろいろなところでとうもんの看板は「これは静大生が大学1年生の時に作ってくれました」といって、私たちの誇りにもなっています。そういう意味で、自分にもしかしたら合わないかもしれないところから、新たに自分を見つけ出すことができるのがフィールドワークだと思います。

最初の時はフィールドワーク先を2つ選べました。1回に15人も来ました。15人の中にはいろいろな学生さんがいらっしゃって、別にここへ来なくてもいいという態度の人もいっぱいいらっしゃいました。ここは仕方がないから来てやって、1つ目は他のところなんだと言われた時に、私の闘志がむらむらと湧きました。

最初に6月ごろ、大学で講義をさせていただく時間があります。とうもんに学生を引っ張ってくるといふプレゼンです。そのプレゼンのために力を尽くしました。

私たちのキーワードは「農村」、「自然」、「子ども」で、単純です。この3つが好きな人が集まります。そのため、そういう意識を持って、そういうのが好きな人に集まっていたので非常によかったと思うのと、(フィールド所属希望者の)ナンバー2をナンバーワンにしてみせるという私のむらむら感がすごく強くなって、どうしたらこの人たちが生き生きやれるのかと思いました。先ほど学生だから失敗が許されるという話がありました。私が大学からミッションを頂いたのは、学生に失敗をさせてくださいとか、口を出すな、手を出すな、失敗するのを黙って見ているということです。それを徹底させていただいたので、それなりに鍛えられたのではないかとと思っています。

先ほどとてもすてきな言葉を言ってくれたと思うのは、今の自分があるのは静大に入った、地域創造学環を選んだ、フィールドワークを伊豆にした、その結果今の自分がある、今の自分があるのは過去の選択がずっとつながっているということ。今があるのは誰でも一緒に、78歳になった私も今日の自分は昨日までの選択で生きています。そのため、これから先いろいろ選択していくと思うのですが、その時々がいい選択をしてください。それは自分のためではなく、人のためにどちらのほうがいいかと思って考えていただけたらいいと思います。老婆心ながらおせっかいでした。

深澤：松崎町で受け入れをしていて、ただの“人足”ではない形で地域に関わっていただきたいというのがありまして、どういう活動に行くべきか、どのような場所に行ったらいいのがある程度ステージを用意することは気を使いました。裏から手を回しておいて1人で行ける環境を作ったり、学生が困らないようにすることも必要ですが、やはり失敗はするのでどうしたらいいのかと自分の頭で考えていくことが非常に大事だと思っています。

今いろいろな情報が入ってきますし、生成AIもそうですが、結局道具なのに、そこに依存してしまって、便利だから使ってそこに振り回されないようにするには経験値が必要だと思っています。いろいろなものが用意されている場合、失敗する機会が今の世の中だいたい減ってきていると思います。でも、実は失敗の中に大変重い大切なものが隠されているので、いわゆる無駄や不便さの中に本当に大切なものがあることを感じてもらいたいと思っていました。

実際に学生が来た時に、やはりつまらないテーマばかり追いかけるのではなく、中にはいろいろな人がいて面白い人もいることを知ってもらいたいし、実は接点を持つ中でも、どのような地域でもいい人も少し変わった人もたくさんいるわけで、いろいろな人に会うことは、今世界中で言われている多様性につながる第一歩ではないかと思っていますので、そういった意味でいうと、いろいろな人と会っていろいろな経験値を積み重ねていくことの大切さをフィールドワークでは提供できたかなと思います。3人の実践者が登壇してお話してもらいましたが、そういう部分が出ているのだと思います。

今社会に出て働いているといろいろなものを感じると思いますし、時代もだいぶ変わってきて不確実な世の中で、みんなの場合どこに社会が向いていくか分からないような状況なので、余計自分というものをしっかり持って、いわゆる誰かに敷かれたレールではないですが、そこが正しいかどうかしっかり見極める力はつけられると思いますし、今も継続していると思います。フィールドワークの継続が、フィールドワークが広くなっただけだと思えば、非常にみんなにとってはプラスだと思って、みんなの意見を聞いていました。

松崎に来てもらった方も会場にいらっしゃいますし、そういう意味で言うと、お互いまだ学び合う必要があるし、それぞれの活躍している場所での話はこちらにとっても学びになるので、相互支援になるだろうと聞いていました。

◆受け入れ先の地域側への影響の有無

深澤：受け入れ側としては、先ほども申し上げましたように松崎町は高等教育機関がない、高校までしかないの、高校を卒業すると98%以上が一回町を出る状況です。そういう地域なので、観光でぶらっと来るケースではなく、学生が地域の課題や地域の人たちと接点を持って動いてくれる機会は本当に少

ない状況でした。

静大のフィールドワークを受け入れ始める前後ぐらいから、実はあちらこちらの大学からフィールドワークやインターンをいろいろ町で受け入れてもらえないかという話を頂くようになりまして、やはりそういう相乗効果も増えていくのかと思いました。どこの大学も地方の創生という部分の文脈の中で課題解決学習をやっているのだと思います。そうこうしているうちに、高校でも探究活動が学習指導要領になって、どんどんそういう方向になっていったのを感じています。

その中でいうと、課題解決、何が課題なのかまず本当は探求しないといけませんが、今言っている地域学もそうですが、もう少し深掘りできたらいいとは高校の学校側には常に言っています。探究もどきだとその子のためにならないのではないかと厳しいことを地元でも言わせてもらっている状況です。

ですので、大学生はもちろんですが、学生が将来どうなりたいかという自己実現をしっかりとサポートできるような課題解決学習が寄与できないと意義がないというのはすごく感じていたので、自分なりにそういう環境を作っておくことが大事だと思います。

その期間だけで終わるとするのは、自治体の予算が単年度で終わるという考え方と一緒に、もっと本当はつながっていくことなので、それをきちんと考えた中で動かしていくことの必要性は非常に感じています。

やっと国の方も高市さんが3年や5年という話を始めて、成果をという話をしているのが今の時代になってきているので、そういった意味でいうと、学生が卒業して終わりではなくて、卒業した後はどう生きていくかのスタート台というか、そういうところに僕らや地域との関係性などが役立っていくことがある意味必要なのではないかと感じていました。

そのため、いろいろなところでそれぞれ活躍しているので、すごくうれしい気持ちです。関わった人がいろいろなところで活動するというのは、僕らにとってもすごく大切なものです。それは地域にとっても同じで、疎遠になったコロナの時につくづく感じたのは、人間、人のつながりの大切さをもう一度いろいろな形で見直されたのではないかと感じています。企業同士の話もそうですが世界では国同士がいろいろなところで戦争をしています、そこはきちんと対話を深めてきちんと相手のことも分かり、その中での関係性をしっかり保つことが多分ウェルビーイングを高めていくのだろうと感じています。

名倉：実は地域に関われるのは本当にありがたかったのですが、私たちにとっては大学の先生は夢のまた夢の空の上の人で、その人たちがとうもんに来てくれるのも、来てくれただけの価値があると誤解をしてしまいました。それは日々の活動の中で思います。でも、それが一過性でないことがとても大事で、大学の先生が生徒さん1人、2人連れてこられることが時々あります。いろいろお話をさせていただいても、それを何に使うのが全然分からなくて、その生徒さんたちは何を学んでくれたのかということがたびたびありました。そのため、フィールドワークというのは一過性ではないことが本当に大事で、一過性ではないからこそ生徒さんたちの学びも成長も見られると思っています。

それと、今大学生ロスが始まりで、時々生産者の皆さんから「この頃大学生来んな」と言われて、本当に困っています。そうすると、やはり静岡大学のこういう学部があって来てくれたけれども、その学部が終わってしまったという話をせざるを得ないです。何で終わってしまったのかという話になるわけです。本当に残念この上ないです。地域としては、大学生が来ることに関心を寄せてくれていました。私はいつも言うのですが、若い人は農村にいただけでいい、何もしてくれなくてもいるだけで農村は元

気になる、まだ若い人に見捨てられていないというか、そのような感じをイメージするわけです。だから、そこが一番来てくれてありがたかったことです。

あとは、先ほどそうだなと思ったのは、自己実現の場所であったか、自己実現を目指している場所であったかというところをすごく危惧しています。自分たちの力では何もならなかったのではないかと思うこともありますが、はた思っ外部講師をお願いすることにしました。このスキルを私たちが教えられないから外部の講師をお願いして講座をしてもらうことになりました。

それから、ここに専門家がいるからこの人の話を聞いてみようという話もしました。なので、チラシを作るのにプロの人に来てもらいました。それから、「遠州横須賀だこ」という昔から有名なたこがあります。それを今若い人が継承している、その継承しているところに今の大学生が話を聞きにいて、何でおじいちゃんがやっているものを孫のあなたが継ぐようになったのか、やりたいと思ったのか、という話を聞かせてもらいに行きました。このように地域の伝統などは、私たちが語るよりまず見たほうがいいと思い、とうもんの里の粋だけでは考えられないことを外へ連れていくことで、いろいろな知見を広めてもらおうという工夫をしました。それに一番反応したのは先生だったりするのです。生徒たちはまだそこまで伝統工芸に興味がいかなかったのだと思います。けれども、先生は感心していました。興味を持ってくれました。

そういうことで、私はいろいろな方に興味を持ってもらうという地域があってよかったなと思います。逆に地域としての誇りや、それから宝物探しになったと思います。地域の皆さんに大学生がこんなふう言っていた、こんなふうに大学では取りあえずとうもんのことを思ってもらえたということをつなぎながら、地域の皆さんの意識の醸成、うちのところはまんざらでもなかったという考え方に持っていきたいと思っていて、実はそれがとうもんの理念なのです。来る人と住む人、その人たちの交流によって地域の宝物を見だし、そして地域に愛情を持ってそのアイデンティティを作っていくというのがとうもんの理念なので、まさにフィールドワークはその理念を実証してくれたと思っています。そのため、私たちにとっては本当に感謝のフィールドワークです。

酒井：われわれのところは、スポーツの施設を中心に地域振興を図っていききたい、また中部横断道路、東名高速の継続点にもなり、長野、新潟方面から来ると最初に静岡が入口になるので、道の駅を作ることを目指しているところでした。そこで皆さんがいろいろ取り組んでいただいている中で、学生のみんなのことを信頼してくれる、頼ってくれるようにだんだんなっていったと思います。

先ほどスライドの中でもご紹介させていただきましたが、フィールドワークの中の一つではありますが、一乗寺の万灯祭というお祭りに、僕の知らないところに入っていました。恐らくお寺のご住職さんとお話をされて、お化けの仮装をして、お化け屋敷の係をやったり、いろいろな準備をしたり、前の日から準備をしたり、地域の方が学生さんのことをすごく信頼してくれてそういった仕事をお任せする、それに対してきちんとした形でお返しするという流れがすごくできていて、静岡大学の学生ということで地域の方からすごく信頼される一つのことにもなったと思っています。

もう一つは、卒業した方々が広島カープで活躍していたり、ハヤテ球団にインターンで1年入っています。地元の方が見に行くとその子に会えば当然あいさつをしますしお話もしますので、すごく距離が近くなって、庵原にフィールドワークで来たことによってそこにある施設やチームの応援を一緒にしてくれるようになったので、勉強以外のところでその町を好きになってくれたり、好きになった以上のお

返しをしてくれたとすごく思っています。

われわれも仕事でやっているとなかなかそこまでの気付きはないのですが、学生と話をしているとそのような話がぼろぼろと出てくるので、そこからヒントをもらって僕らの仕事に活かしていることがすごくありました。先ほど言いましたが、ただ運動や栄養だけではなくて、ストレス発散、食事も食べてみんなで楽しんでもらおうというアイデアは、確かにコロナの時期を楽しいことでストレス発散する、食事をするなんて出てこなかったけれども、レストランの活用方法でも頭を悩めたところではあったので、そういう話も出てきてくれてすごくありがたかったと思います。僕ら施設の人間だけでもそう思っていましたので、地域の方はそれ以上にありがたかったと思います。

庵原地区の鳥が太陽に向かって飛んでいくシンボルマークのデザインをお願いしたら作ってくれましたし、今マルシェ、フェスをやると、お店ごとに看板を出しているのですが、以前学生さんが作ってくれた看板をいまだに大事に使ってくれている出店者の方もいらっしゃいます。フィールドワークはいったん終了にはなるのかもしれませんが、皆さんがやったことはずっと残っていくと思います。これはどこのフィールドも同じだと思います。そういった意味では、卒業生の皆さん誇りに思っていてほしいと思っています。

◆地域の皆様のお話を聞いての印象・感想（卒業生）

齋藤：市役所で就職をして働いている時に「あの時大学生が来てくれたよね」、「あのイベントに来てくれた時の子？」という感じで言ってもらえたり、地域の中で覚えてくれている方がたくさんいるというのは自信にもつながるし、自分たちがやっていたよかったということにつながっていくと思いました。

何をして、何人このイベントに来てくれたという明確な実績ももちろん大切なのですが、それに加えて受け入れてくださった皆さんとのつながりだったり、あとはその方たちがやりたいことや、こんなふうにしたいという思いを共有できたところにもすごく価値があったとあらためて思いました。

上田：私もフィールドワークをよく分からず1年の後期に行って、三重県出身なので静岡は右も左も分からず行ったのですが、フィールドワークを通して伊豆の魅力を知って、静岡が好きになって、今も月に2回ぐらい来るような、そんな静岡の魅力、地域の魅力をあらためて知らせていただく貴重な機会だったと思います。

また、伊豆の仁科のおばさんは元気かな、天城のあそこのおばさんは今どうしているかな、地震が起きたらあのおばさんは大丈夫かなと、顔が思い浮かぶような関係になれたのはすごくありがたかったと思います。毎月行かせていただいたフィールドワークは「知（地）の拠点」というプログラムで、チの拠点の「チ」は知識の「知」と地域の「地」がありますが、訪問箇所はまさに地域の拠点となっていたのではないかと、関係人口としてすごく学生が入らせていただく貴重な機会になっていたと思います。

一方で、課題としては、先ほどおっしゃったように継続性です。私も何とか後輩1人に入らせていただき継続して活動しましたし、どう継続していくかと、2つのチの拠点の「知識」の方と、どう「地域」の拠点になっていくかで、知識の方でどう地域に影響を与えたのか、どう学生に影響を与えたのか、難しいですけれども、つぶさに私自身への戒めも込めて考えないと、大学としても研究機関としても考えていくことが課題だと思います。

今まさにフィールドワークが終わり、どう学生が進路に影響を与えたのか、どう地域に還元をしたのか、そういうところを測っていくこともすごく重要ですし、地域にどう還元できていたのかもフィールドワークをやりながらずっと疑問とし、考え続けていたところですが、どう影響があるのかというのはあらためて考えていかないといけないと思います。

環境整備という面では、伊豆を初めて訪れた際、天城のフィールドワーク後に静岡大学の天城フィールドワークセンターで宿泊したのですが、お湯が出ないという状況でした。冬に行ったのですが、みんな水風呂、水でシャワーを浴びるという過酷な状態があって、何とかフィールドワークの環境も整備できないのかと思いました。今新しく伊豆に拠点ができていますが、フィールドワークをするための拠点の環境整備も重要だと思います。

最後に継続性と関連しますが、フィールドワークが今なくなることで地域としては今後どうするのかという課題もありますけれども、地域の人がお任せ主義になってしまわないような、学生と一緒に歩いて伴走して、共同体としてやらせていただいたという成果でありつつも、逆に入り過ぎたことで学生がいなくなった後の地域の主体性を奪わないような入り方も考えていかないといけないと思ったところです。

梅田：先ほど地域創造学環でフィールドワークがなくなってしまうことが残念という話があったと思いますが、卒業生の私は本当に残念だと思っています。私たちも頑張って活動していたし、今日も来てくださっていますけれども、後輩がいつも頑張っていたのも見ていたので、これが終わってしまうのは残念だと思っています。

ただ、卒業して終わりではない形や、一過性ではない形というお話も先ほどありましたけれども、自己紹介でもお伝えしたみたいに「あのイベントで来ていた子だね」と、先ほど齋藤さんもおっしゃっていたように、地域の方々の記憶の中だったり、地域の建物や制作物など、形として残っているという声を頂けて、それはすごくうれしいです。

私の代の東伊豆フィールドの同期は、毎年1回ぐらいはフィールドワーク先の東伊豆に集まって、地域にお金を落として帰ろうとやっていますが、一度も戻ってきていなかったり、どこへ行ってしまったのか分からない年代もいるという話を聞いていて、年代差も難しいと思いますが、どの世代もどの学年もその地域に愛着を持つ、そういう仕組みづくりが本当はもっとできたのではないかと課題として思ったりもします。



◆今社会人として活躍をされている中で感じる、今後の地域人材育成のあり方と大学に期待すること

梅田：地域人材育成の在り方ということで、一学生、一卒業生がたいそうなことは言えないと思っておりますが、先ほども言わせていただいたように、年に1回フィールドワーク先に集まってお祭り騒ぎをしているのは、東伊豆を第二のふるさとだと思っているからなのです。私自身北海道なのですが、北海道の地元よりも愛着が正直ありますし、今住んでいる町になっています。そのような愛着が持てたり関わり続ける人が生まれるのは、地域で受け入れをしてくださっていた方たちの影響が大きいと思っております。

受け入れをしてくださっていた荒武さんやお世話になった町の方々に会いたくて、私たちは年に1回集まっています。そのような温かみのあるフィールドワーク活動ができるような仕組みを作っていけたら、地域人材はどんどん増えて育っていくのではないかと思います。

上田：先ほどと重複するところもありますが、私も皆さんがおっしゃったように三重から来て静岡のとりこになって今も静岡に関わらせていただいているので、フィールドワークがあつて大変よかったです。それは地域には課題がたくさんあるけれども、地域が本当に魅力的で、たくさんの魅力があるところが私たちをそうさせていると思います。

期待することとしては、フィールドワークが実施できる背景には、地域と大学、これまでの関係性、先輩が築いた関係性を私たちが引き継いで後輩が引き継いだ関係性があつてこそだと思つるので、その関係性を今回で閉ざすことなく、継続的に地域と関わり続ける地域の拠点であつてほしいと思つています。本当に貴重な機会を頂いて、お話を聞かせていただきました。友達から「伊豆に来週行くんだけど」と言われて、「あそこはいいよ」と勝手な観光大使をやっていますが、そのように応援したくなる、紹介したくなる、そんな人がたくさん増えると良いと思つています。

齋藤：御前崎市は高校が1校だけで、近くに大学や駅がないので、結局大学に通えないからと、行きたい大学があつたら基本市外に出るのが現状なので、こういうフィールドワークで学生、若い世代の人が入ってくることはすごく地域の人たちにも刺激になりますし、とてもいいと思えます。その反面、今言つたように本当に交通の便が悪いところなので、フィールドワークは人によって行く回数がばらばらだったのかと当時思つていました。私はどんどん行きたい時にコロナ禍だったのもありますけれども、現場に行ける回数が限られている時があつて、個人的に有志で集まって行くこともありました。私は地元だったので大丈夫でしたが、そうすると大学生はお金がなかったり、交通費を払えないことがあつたので、授業でももちろん行っているのですが、フィールドワークで関わつた中で追加で活動ができるような体制があると少しうれしいと当時思つていました。

今の2人もおっしゃつたように、何か教育ということで数値化したり、何か結果を求められると公表に困るようなことが、自分も今教育委員会に所属しているので感じるところがあるのですが、そういうところが明確になるプラス気持ちの面、こういう方たちがいたから自分をもっと関わっていきたいというハード的なところとソフト的なところと両方が結果として見えてきたらすごくいいなと思つました。

◆受け入れ側から見る、今後の地域人材育成のあり方と大学に期待すること

酒井：先ほど名倉さんや深澤町長から、学生だからといっても失敗をあえてさせるというお話がありましたが、逆に僕は失敗している学生に助けられることも多かったです。

結局助けられることが多かったのですが、地域に入ってきていただいて、何かの取り組みや何かの作業に入っていた時に、こういう方法があるよね、これで進めようという話になるのですが、進め方ややり方の答えは一つではないです。いろいろなやり方やいろいろな方法があります。どういったやり方をしたらいいのか、「これをこうしたほうがいい」、地域の方が「こういうふうにやって」と言っても、「いや、このようにやったほうがいい」というのをみんなで相談して、新しいやり方を作ってくれて、それを地域の方が「そうだよね」となっていたりしました。

結局何が言いたいかというと、現場に出てみんなで相談したり目の前の課題を見て、考えていく力をすごく付けてくれたのかなと思います。先ほどから言っているように、それが今卒業して社会に出てから考える力や、上司から教えてもらった方法ではなくて、これはこのようにしたらいい、このようにやって改善してきましたと提案をしたり、自分たちが知らないうちに身に付いて、社会に出てから役に立っていることが多いのではないかと思います。

スポーツの話をする、今スタジアムやアリーナ、いろいろな施設ができています。確かにそれはいいのですが、そこを動かせる人間がいません。だから若い人たち、特に大学生、高等教育機関の皆さんには、どんどんそういった気付き、考え方、学びを持って現場に出て行ってほしいです。そして、施設やいろいろなことを動かしてほしいです。施設ばかりできて、そのようなところの取り組みが難しくなっているとすごく感じるので、今回のこのフィールドワークの学びは本当に大事だったと思います。皆さんはそのような力がどんどん付いていると思います。

名倉：地域に行くと顔が見える関係がすごく大事だと先ほど皆さんがおっしゃっていて、その関係を築かれてきました。では、フィールドワークのない地域の人材育成とは何だろうと考えた時に、考えにくい、想像が付きにくいというのが正直な私の考えです。

大学の授業の中で人材育成ができるのならば、フィールドワークは要りません。だけど、現場の意見を聞いて、そこに何が起こっているのか知って、そこから課題を見つけて、解決方法を考えて、事業化していくというその一連の流れを学ぶには、やはり現場を見ないと難しいと思います。

シャッター通りがたくさんあると言われるけれども、シャッター通りばかりです。茶畑は荒れ、ハウスはそのまま残骸になっていて、あれはシャッター通りです。その現状を見ずしてそのようには言わないでほしいと思うし、限界集落というけれども、言い方を考えたら長寿の里なのです。そのようにいろいろな意味で現場を見ていただくというのはとても大事なことで、もし授業の中で課題が見つかったら、その現場にふさわしい現地検証をぜひやっていただきたいと思います。現地検証をやっていただくことで深掘してほしいです。本当に学生が感じて、そこの人の話を聞いて、それがしっかり課題として自分の心に残るような、そういう人材をきちんと育成してほしいと思います。

フィールドワークがなくなっても、人材育成という使命は残ると思います。だから、私たちがやってきたことが無駄にならないように、地域の皆さんが受け入れてくれた温かい土壌が静岡県にはあちらこちらにあることを忘れないように、単発でいいのでぜひ遊びに来ていただいて声を聞いていただけると

うな仕組みができてくれたらありがたいと私は思っています。

とうもんの里は頑張っているでも受け入れますので、ぜひ学生を大勢連れて遊びに来てください。そして、私たちのNPO法人は32名います。全員女です。平均年齢70歳、決して若くはないです。でも、これから先5年、10年やろうと言っています。そのため、年寄りたちがやっていく時に足りないものを助けるには、若い力が必要です。その時にあなたたちは何ができますかと問い掛けたいです。そして、私たちは若い人たちに助けてほしいことを明確化して事業化していく、その事業に乗ってきた学生さんには必ずマネタイズしてお返しをする、そういう形が私たちのこれからの人材育成の一つのカリキュラムになると思います。とうもんの里では、これからそういうことを検討していきたいと思っています。

今サポータークラブを作ったのですが、サポータークラブは無償です。無償では若い人が育ちません。学生のアルバイトでも結構ですので、有償でしっかり責任を取ってもらうようなカリキュラムを作って、責任を持って、人と地域の力なりを変えていっていただけたら、そういう形での人材育成もあり得るのかなと今ここで皆さんのお話を聞きながら思いました。就職という形ではなく、もう一つあるかなと思います。ただ、NPOはお金がないですので、若い人が生活をしての就職はできません、社会保障も付けられません、時給も最低限でやらせていただきます。それでもいいとおっしゃるなら来てください。お待ちしております。

深澤：今後の地域人材の育成というところで、特段自分は実際自治体のトップでやっている中で言うと、やはりこれからは分母が少なくなっていく中で、一人一人の人材の育成は課題になっていると思っています。そのためには、先ほどから言っているとおり、いろいろな形で人と出会う現場の感覚や肌感が非常に重要かと思っています。地域人材を育成するというのも地域がないと育成はできないというフィールドがあるのではないかと考えています。

大学のほうに期待することという、大学生という形で静岡大学に来る子ども、学生、生徒が、ここに来てよかったと思えるような、ここで学んでよかったと思えるような存在意義があるのではないかと考えています。静岡大学のルーツは、全県で大学をサポートして設立されたと伺っていますので、やはりどこか地方も含めた中で大学の存在意義をもっと発揮していただけるといいと思っていますし、先ほど三重から静大に来た方がこうやって静岡に関わりを持って活躍することもありますし、いろいろな地域から静岡大学で学びたいと思えるような形が必要だと思っています。

今これから社会が変わってくる中で、今まで考えられた連携が出てくると思います。特に産官学の連携でいろいろなものをやる場合に、大学で学ぶだけではなくて、このような社会での経験値がその後社会に出た後も生きてくるでしょうし、大学と企業、そしてその地域の自治体、そこに住んでいる人たちとの関わりの中で経験値を積んでもらえると、地域人材というのが学生だけではなくてそこに住む人、もしくはそこに関わる人全てが学び続けることで育成をされていかなければ、大げさですが日本がどうなっていくかを本気で考えていかなければいけない時代になってくると思っています。

酒井さん、名倉さんに会いにあって、いろいろなことを学ぶリアルの意味を、大学、高等教育機関の中でも必要なメニューとして残しておく必要があると、外部から勝手なことを言わせてもらっていますが、感じているところです。もちろん伊豆の松崎町にもぜひお越しください。

太田：ありがとうございました。

たくさんの貴重なご示唆を頂いたとともに、教育プログラムとしての学環は終わるのですが、蓄積を残していかないといけないと強く思った次第です。大学教員は引き続き各学部などで教育をしていますが、もう少し考え直すところも含めて、いろいろと示唆を頂いたとともに、あるべき大学と地域の関係を考えるきっかけなり視点をたくさん頂きました。なかなか卒業生の皆さんの声を伺うことはないので、すごく貴重なコメントなりご示唆を頂いたと思っています。最後にパネリストの皆さんに拍手をお願いできればと思います。今日はありがとうございました。



当日の様子は下記サイトからご覧いただけます。

<https://www.srd.shizuoka.ac.jp>



おわりに

静岡大学地域創造学環 副学環長

フィールドワーク総括ワーキング座長 太田 隆之

地域創造学環が取り組んできたフィールドワークは、何よりも受け入れ先であった地域の皆様から多大なご協力を得て行われてまいりました。そして、本報告集を作成するに際して、皆様からコメントをいただくとともに、本報告集でも取り上げた総括フォーラムにもお越しいただき、学生が活動できる状況を工夫を凝らして整えていただいたことなどのお話を伺いました。当日ご登壇をいただいた酒井政幸様、名倉光子様、深澤準弥様からは具体的な活動についてのお話をいただくとともに、フィールドワークを経験して地域創造学環を卒業した学生たちにもメールをいただきました。深く感謝申し上げます。

フィールドワークをテーマにした総括フォーラムを実施し、本報告集を作成するに至ったのは、地域創造学環を担当してきた教員からの発案がきっかけでありました。

令和6（2024）年度をもって教育プログラムである地域創造学環が取り組んできたフィールドワークが終わるにあたって、地域創造学環の教授会にあたる運営会議では、地域創造学環を終えていくに際して、フィールドワークを含む地域創造学環の取り組みの総括をしていく必要があるだろう、という意見があり、それに賛同する意見が複数出ました。こうした意見を契機に、フィールドワーク科目の運営を担ってきたフィールドワーク委員会で総括のあり方について検討を行うとともに、令和7（2025）年度にフィールドワーク総括ワーキンググループを立ち上げ、総括のためのイベントの検討と報告集の内容の検討および作成に取り組んでまいりました。本報告集は一連の取り組みを経て完成に至りましたが、約9年間にわたって行われてきたフィールドワークの取り組みの一端を示したに過ぎないと考えております。

しかし、本報告集を手にとった受け入れ先の地域の皆様や地域創造学環を卒業した皆さんがフィールドワークを振り返るきっかけになれば、また、地域創造学環のフィールドワークと同様の取り組みをされている高校や大学の皆様に少しでも示唆があれば、望外の喜びです。

最後に、本報告書では十分に扱われておりませんが、フィールドワークは地域創造学環の中に設けられたフィールドワークオフィスの皆様に支えられることで成立してまいりました。これまでオフィスでご助力をいただきました皆様、そして本報告集の作成に際して、フィールドワークオフィスの中安章江様に大変なご尽力をいただきましたことに感謝申し上げます。

静岡大学 地域創造学環フィールドワーク総括報告集
—地域・学生・教員の9年間の軌跡—

2026年3月発行

表紙デザイン 静岡大学地域創造学環 アート&マネジメントコース 石上すみれ

編集・発行 静岡大学地域創造学環フィールドワーク総括ワーキング・
静岡大学地域創造学環フィールドワークオフィス
座長・太田隆之 彭宇潔 山本隆太 占部史人 川崎和也 中安章江

静岡大学地域創造学環
〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836
TEL:054-238-4256
